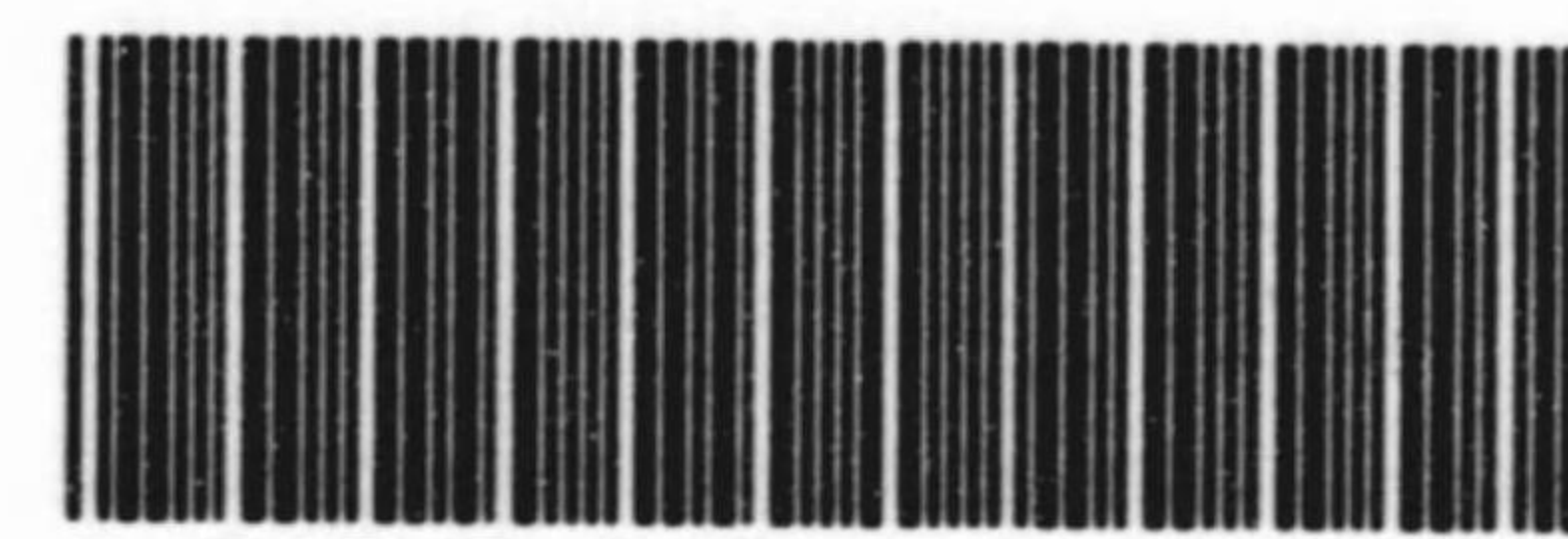


2



0050567000

0050567-000

特225-232

尚綱の滴り

浜田松次郎・著

長崎次郎書店支店

2版

昭和16

AHM

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

時 225
232



熊本縣尚綱
高等女學校長 濱田松次郎著

の滴り



350



目次

前編

第一 尙綱精神	
1 尙綱五ヶ條	一
2 尙綱の心	三
3 全	八
第二 貞操	
1 貞操第一	一七
2 日本婦人の長所—貞操性について	二四
第三 敬と愛	三七
第四 勤と儉	
1 暑中の勤勞作業 前記—準備作業	四三
2 全 勤勞作業期間	七二
3 全 後記	七三

4 働くこと云ふこと	103
第五 儉 約	108
第六 報 恩	
1 市内小學校に於ける學友會	113
2 本校滿五十年記念式辭	116
3 永年勤績祝賀會に於ける挨拶	115

後 編

第一 日本婦人の貞操觀	114
第二 愛について	115
第三 税所敦子刀自のこと	116
第四 婦人の消費經濟と云ふことに就いて	117
第五 父を憶ふ	118

序

私は、難かしいことを考へる思索家でもなく、美文を行ふ文章家でもありません。謂はゞ斯ういふ書物を書くこと云ふこと自体が、僭越の沙汰かも知れないのであります。

しかし、私は一方教育界に身をおくこと、明治三十年以降四十五ヶ年。女子教育界に唸喘すること前後三十九年の久しきに亙り、其の中三十六ヶ年は、たゞ兩つの女學校を経て來たのであつて、前校に十七ヶ年、後の學校に十九ヶ年間勤績致しました。

四十年同じはたけの畑を打つといふのが、私の日頃の述懐であります。

斯の永い公生涯を振り返つて見て、事實有つたこと、有つてはならぬこと、

又有つてほしいと願ふこと、或は斯う有らねばならぬと確信すること等々経験するに従つて書き綴つて見たのが、本小篇であります。

今や、私は年漸く老いて、健康もまた充分ではありません。思へば毎年々々同じ畑を耕し、同じ肥料を施し、同じ雑草を抜いて來ました。何さま、長年月のことでもありますので、お蔭で、考へて見たいと思ふことは存分に考へ、行つて見たいと思つたことも或る程度まではやり通して參りました。最う此の上は、少しの憾みも悔いありません。或は、何もかも清算して見ると、たゞ赤字のみが残るかも知れないのであります。誠にお恥しいことながら、事實ならば止むを得ないことで、皆様にお許しを願ふほかありません。

たゞ、其の間私自身から申し上げますれば、斯の教育といふ仕事の、わけても女子教育といふことの、底ひも知れぬ深さと、難しさと、尊さを痛感する機会を得させて頂いた様な氣持が致します。さりながら世間では、反對に女子教育

と云へば、至極安易なものゝやうに考へがちであるのが事實であります。多分生徒のみなが亂暴なぞしないでおとなしいからであります。しかし本文にも申上げる通り、女は總てのものを産む。彼の一休禪師が「女をば生みのみ藏と言ふぞげに」と咏じたとほり子を産み、愛を産み、國体をも産んで來た根源であると同時に、やゝもすれば、個人主義と、虚榮と、頹廢とを産み出す怖る可きバンドラの箱の有ち主でもあります。

斯様な平凡なことは、千も萬も承知の筈でありながら、しかも其の教育が、おろそかになり勝ちな現代世相を、何とか考へなほす譯には行かないものでありませうか。まことに、現下の女子教育は、男子の借り衣で、歌つたり、踊つたりしてゐます。謂はゆる粟を植ゑて麥を育てゝゐます。で、やゝもすると徹頭徹尾男子通りに、空虚な知識の堆積裡に埋瘞し去らうとして居ります。私共女子教育者は平氣で知識丈けを盛つた點數で、婦人の人格其のものゝ全價値を

秤らうと致して居るのであります。最も寒心に堪へないのは、純な感情の有ち主である年少き女性達を、怖ろしい入學考査の競争の坩堝の中に投り込んで、血の匙で混ぜ返してゐることです。今や我が無告の少女達は、修羅と餓鬼と地獄の三惡道に彷徨ひつゝ心から泣いて居ります。落花狼藉とは、眞に斯んな光景を言ふのでありませう。斯くして日本婦人の美しさも、誇らしさも尊さも無慘に蹂み躪られて了ふのではありますまいか。

で、考へて見ると、現代の女子教育と言ふものは、寧ろ一種の壓搾機であつて、可惜婦人の魂の露や、霈ひやを絞り上げて枯葉の如うに乾燥しようとして企てゝゐる様な氣がしてなりません。

されば、現下の女子教育者も、娘有つ母親も、婦人先覺者と稱せられる所謂知識階級の婦人達も、婦人それ自身も、やがては一般大衆も、もつともつと婦人の問題に大きな關心を有ち、鋭き反省と、深き自覺とを有たなければ、噤臍

の悔いを千載に貽すことゝなりはしないでせうか。

一体私は、日本婦人の、世にも尊き不易の價值躰が、その足許に埋藏されてゐる様な氣が致します。出来ることならば、斯の價值の採掘者は、婦人自身であつてほしいものと、日頃から念じて居るものであります。

私は、謂ゆる實在せる日本精神と言ふものゝ分量が、茲に十在るものならば、その半分即ち五若しくは夫れ以上、たしかに婦人の胸裡に秘められてゐるものと信じてをります。願はくは現代の凡ての層の教育者も、虚榮に誇る大方の娘の母親も、並に其の他の人々も、この日本婦人の美田を無暗に掘り返して曇々たる石塊の荒園に歸せしむる勿れと言ひたいのであります。

然らばと言つて、私は、目今の女子教育法なるものを根本から呪ふたり、大革新を企てたりすることを考へては居りません。たゞ現在のまゝにしておいても、もつともつと家事を働かせ、働く機會を多く與へ、親の爲めに、老者の爲

めに、はた兄弟姉妹の爲めに、よりよき奉仕を捧げしめたい。そして家族の喜びを自分の喜びに、家族の憂ひを自分の憂ひに致させたいのでありまして、詰る所、近頃教育界の合ひ言葉となつてゐる學と教と行とを一本の根元に近づけたいのであります。斯くして始めて日本婦人らしい情操陶冶と言ふものが企圖せらるべきではないかと思ふのであります。

何といつても今の女學校の教育は、頭だけの稽古に偏してをります。少くとも頭だけの半分の教育でしかない。其の結果段々女らしさの純粹音を失つて中間性の濁音半濁音を多量に帯びて來てをるのであります。さればこれに手と足との行の活動が加はつて、始めて全躰の働きとなり、全躰が震動を始めたときに本筋の女らしさの清朗な本調子に戻つて來ると考へられるのであります。斯様な考から私は、本書の前編所載の施設を二十年近く繼續實行して來たのであるが、本書はたゞ其のあらましを書いて見た大けに過ぎないのであります。

願へば、二十年の長い間、種々のことを目論んで年若き乙女達を縦横に驅り立て、參りました。中には空砲に終つた數々もありましたらうが、又確かに手應へが有つたことも少なくありませんでした。此の間に處して、共に手を携へて斯道に盡瘁して下すつた本校五十餘名の教職員の方々は、並大抵でない煩雜無類の此の學園の仕事に對して、心から賛意を寄せられ、善かれ悪しかれ、若干の經驗を招徠し得たことを衷心から感謝して居ります。後編の思想は、私の自儘に考へた心の跡でありますから、香氣昌盛の梅檀の根芽（そんなものはないが）も、臭くして香しからずと言はれてゐる伊蘭の一樹も、何もかも私のものであります。そして全部私共尙綱林の一滴であります。

尙ほ最後に、この小編に對し、批正の勞を惜まれなかつた本校教諭金津正夫先生並びに表紙の意匠に松岡正直先生を煩はしたることについて最大の謝意を表しつゝ、擲筆致します。

穴だらけごみだらけ我が曝書かな

昭和十六年一月上浣

大江町寓居にて

濱田松次郎誌

第二版について

拙著「尙綱の滴り」の第二版を上梓することになりました。足らぬ粗材が多少でも御参考になりますれば、無上の光榮に存じます。

第二版は、殆んど全部第一版の儘で、訂正したところと差し加へたのが少々ある許りであります。文に馴れぬことゝて思ふことが十分に表現の出来ないのでを憾みと致します。

昭和十六年十一月

著者誌

尙綱の滴り

前篇

第一 尙綱精神

1、尙綱五ヶ條——(昭和四年三月制定)

左に掲ぐるは、本校の定めた尙綱五ヶ條の本文である。

一、尙綱 錦を衣て綱を尙ふ。是れ我等の標識なり。表を飾るな。心を磨け。

一、貞操 貞操は我等の生命なり。清く、正しく、固く持て。

一、敬愛 敬と愛とは道德の樞機にして、良妻賢母は我等の理想なり。誠を盡して理想に進め。

2

一、勤儉 勤と儉とは、修身齊家の要道なり。撓むな彊めよ。

一、報恩 君の恩、親の恩、師の恩、社會の恩、神佛の恩、諸恩の中に我等は芽ぐむ。本に報い始めに反れ。

この尙綱五ヶ條は、ただ思ひつきに、出來合ひにこしらへたものではない。言はば本校五十年の長い歴史の間に、凝結し、胎生し、産み出された私どもの尊き精神である。されば他人の帽子でも冠るやうに、外方から持つて來て、くつつけたものではなく、内部から産れ出た必然の精神であると考へて居る。即ち五十年間の鬱結してゐた精神が、右の成文に由つて表現せられたのである。中庸に謂ゆる「君子の道は闡然として日に章かに」である。

この尙綱五ヶ條は、學校では毎週。月曜、金曜の二度、朝の行事として、嚴

肅な朝禮の中に朗誦せられるのである。

職員も生徒も一齊に起立し瞑目する、しかして滿堂の靜寂が三分間續く、かの俳聖芭蕉が

靜かなれば、物皆自得す

と云つたといふ、この自得の靜けさが、私共を完全に領したとき、尙綱五ヶ條が徐ろに讀み上げられる。斯うした瞬間一千餘人の心の絃が極度に緊張し、尙綱の五指が緩やかに動いて、不律の樂音が奏でられるのである。

2. 尙綱の心 其の一

尙綱とは、中庸に「錦を衣て綱を尙ふ、其の文の著しきを惡んでなり。」とあるその中の文字を取つたのである。

綱とは、單衣の粗布にて作る、とあるから、内に錦を衣て之を表面に現はさ

3

す。却つてわざと其の上に單衣を纏ひ、覆ひ隠す意味で、錦の美を内面に裹んで、妄りに表面化しない、つまり内面の美化、と云ふ意味に取つて、私共は之を尙綱美と稱へてゐる。

歐米人は物を細かく分析して考へるといはれてゐる。物体は分子から、分子は原子から、原子は又電子からといふ風に。どこ迄も悟性といふ刃で切り込んで行くのである。

之に反して、日本人は、全躰として見、眺め、觀照し、其の中に没入する。歐米人は感覺に觸れて感得しようとする。彼等が花を愛づるときでも。花瓣の美しい色を視。又その匂ひを嗅ぐ。彼等には、樹木の全景の姿態や、枝の自然のたゞすまひの如きは、到底諒解出來ない處であると言はれてゐる。成程彼等の風俗も、禮儀も皆感覺的である様に考へられる。彼等の敬禮はまづ、握手である。接吻である、抱擁である。しかして日本の作法は、對者の身邊に近寄る

さへたしなまなければならぬことだとせられてゐる。

裸躰美は美の至上だと彼等は言ふ。いかにもさうかも知れない。しかし其の餘りの露骨さに、我等一般日本人の趣味としては同感に遠いものがある。或る場合には嫌惡さへ禁じ得ない。

裸の富士は眞の富士の姿ではない。縹緲として白雲徂徠する處。そこに我が神州富士の風韻が湧く。

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

見える櫻よりも見えぬ櫻、眼で見える櫻よりも心で咏歎する櫻。霞を隔て、眺め入るとき、我等はその感覺の裏面に至美を睹、至酔を感じ、これに憧れなづかしむのである。

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花。

これは朝霞の隙に、朝日に映ゆる花を看て、その刹那の感懷を咏うたのであ

る。所謂内面美の映發であつて、前の歌は靜的であり、後の歌は動的である。そして兩者は表裏一杼の咏嘆形であると考へられる。

詩に曰く、錦を衣て、綱を尙ふ。其の文を著しきを惡んでなり。

美しい錦を衣て、之を表面に現さず、態と其の上に粗布を加ふ。感覺美を避けて心の美、想像の美、咏嘆の至美を味得する。謂ゆる國ぶりの「床しさ」であらう。如何にも私共は尙綱の意は奥床しさの心の象徴であると考へてゐる。

大石良雄は、あの偉大な器を抱いてゐて、晝行燈の綽名をつけられてゐたといふことである。一向光らないといふ意味であらう。然るに彼の松の廊下の凶變で赤穂の空が急に闇になつたとき、彼れの胸裡より迸る一導の光明は、まさに山風霞を拂つて櫻花朝日に映發する感がある。

紫式部は、稀世の才媛であつたが、一の字も知らぬやうな風であつたと傳へられてゐる。

龍が裸で見えては蛇になる。黒い雲の隙間から、チラチラ見えるので、龍が龍である。

外國の王様は、ステッキを振つて市中を散歩したり、古本屋の店頭に立見をしたりなさると云ふことである。而うしてさう云ふ王様が平民的だと言つて、人氣があらせられると聞いて居る。畏れ多いけれども、我が皇室に於かせられては、九重の雲深くおはします。八雲立つ出雲八重垣と詠つたそのかみより、我等は雲のかなたの幽玄界に、有難く尊い現津御神ををろがみまつる心を有ら得る。

大君はいかにいますと仰き見れば高天の原ぞ霞こめたる 三條 實美

されば私共の尙綱精神は、懐しいもの、床しいもの、有難いもの、尊いものを内包してをる日本國民性だと信じてをる。

3、尙綱の心 其の二

表を飾るな心を磨け(反省と自覚)——昭和十四年三月十八日

第四十八回卒業式々場に於て述べた式辭である

卒業式の式辭を申し述べます。

皆さんは本日をも以て本校を卒業なさるのでありますが、この卒業の榮典は恐らく皆さんに一生忘れることの出来ない皆さんの心の中の一大記念塔でありませう。特にこの東亞新秩序建設といふ千載一遇の好機に於ける記念塔は皆さんに取つては光榮の上もないものであると考へられます。しかしながらたゞ高い記念塔が卒然として徒らに樹つて居たと云ふ丈けでは、人生何等の意味を成しません。さればこの記念塔の碑銘を只今此の席上で述べ、皆さんの心の面に永久に彫りつけて忘れない様にして頂きたいと思ふのであります。

よく引かれる例であります。皆さんは小學校の讀本で、次の如うな意味のことを學ばれました。それは鼠の嫁入りと云ふのであります。

「鼠の娘さんの親鼠は、大層美しい立派な娘さんを、此度嫁入りさせるので、たゞの鼠同志では惜しいことだと考へて、世界中で一番偉いお日さんの處に嫁入りさせようと思いました。するとお日さんは俺よりも雲の方が偉いと仰有いました。そこで雲さんに申し出ますと、それは俺より風さんの方が偉いと申されました。風さんは又俺より壁が偉いと云けれ、壁の處に參りますと、俺よりは鼠さんは俺を囓り倒すから鼠さんの方が偉いと申されました。遂にグル／＼と元に戻り、鼠さんが一番偉いと云ふことになつて、鼠さんにお嫁に往くことになり目出度く納まつた。」

と云ふのであります。

皆さん、鼠では鼠が一番偉いやうに、吾々人間は人間が一番偉い。そして人

間の中では日本人が一番偉く、日本では自分の家が一番よくて、自分のお父さんやお母さんが又一番良いことになり、そして自分の卒業學校尙綱校が一番良く、結局自分自身が世界中で一番良いと云ふことになるのであります。斯う云ふ考に足場を定め、いつ如何なる場合でも、自分の立つて居る土地に自分自身しつかりと力足を踏み締めて進む。これで人間は自分一人で千人力にも萬人力にもなるのであります。

しかしながらよく考へて見ると、吾々は、たゞ此の儘では何う慾目で見ても偉くもなく良くもない。唯々平凡な自分であります。そこで皆さんはこれを良く成すのです。ところが人間は妙なもので他人に教へられ導かれて良くなる方面もあるが、不思議なことに、人間は人間自身で、云はゞ自分自身で良く成す力を有つてゐる。之を名づけて自己反省或は自覺と申します。これがあるので人間はどれだけでも良くもなり偉くもなるのだと云へるのであります。

ます。

皆さんは五ヶ年間本校で學ばれ、随分自分で苦勞もなすつた。が、又相當叱られもした。勿論このお叱りは、皆さんを良く成すための手段であるから感謝しなければなりません。今日以後も、幾年か御家庭に引き取られて、なほお父さんやお母さんから、此の上にもお叱りを蒙らなければならぬ場合もあります。しかしながら人間は叱り人の有る間は大丈夫であります。或は悠々として晝寢をしてゐてもよいかも知れません。起きて可いときは枕許で叱つて下さる人さまがお有りになるからであります。しかし聽て皆さんは叱り人のない時代に入らなければならぬ。この時こそ、皆さんの獨立自主、一番人間の人間らしい働きの時代、所謂人間一生の黄金時代でありまして、ヒョツとするとこの時代に餘り露骨に人様から叱られる様になると、もう破滅が足許に迫つて來てゐるかも知れません。そこで此の時代に於ては他人に叱つて貰ふかはりに、自分

を自分で叱るのです。結局人間は一生涯を通じて、他人にか自分自身にか、叱られ通しに叱つて貰ふやうに出来てゐる。これが即ち自己反省、或は自覺であつて尙綱五ヶ條に、表を飾るな心を磨けとある、心を磨くと云ふことに當るのであります。

昔世界の四聖の一人として數へられた希臘のソクラテイスは、「汝自らを知れ」と申しまして、これを其の教の出発点としたと聞いて居ります。

いつかもこの場所で話しましたやうに、幕末の志士吉田松陰先生が一番好きな文句は、論語の中の

「曾子曰く、吾れ日に三たび吾が身を省みる。人の爲めに謀りて忠ならざる乎。朋友と交りて信ならざる乎。習はざるを傳ふる乎」

と謂ふのであつて、先生が召捕られて松下村塾を引きあげられるときに、伊藤俊介（後の博文公）をお呼びになつて、例の文句を覚えてゐるかと言つ

た。そこで伊藤さんはハイ覚えて居りますと返答なすつたら、好し好しと言はれて大變よい御機嫌であつたといふことである。後で友達が、例の文句とは何のことかと謂つて問うたら、「曾子曰に三たびさ……」と謂はれたさうであります。

現代の日本の哲學の最高權威でいらつしやる西田幾太郎博士も

「實地上眞の善とは唯一つあるのみである。即ち自己を知るといふに盡きてゐる……」

と謂つてゐられます。

しかしながら皆さん。自覺、反省の説明は以上では足らぬと私は考へる。何故なれば自分を省み反省しても、自分の考へたり、爲たりしたことが、凡て良いことだと高慢にも高く止まつて人を見下すやうに考へてはならぬからであります。されば上に云つたソクラテイスも

「自分は唯一言丈け知るのみである。さうしてそれは自分が何も知らぬといふことである」

と謂つたさうである。あの親鸞聖人のお書きになつたものを見ると、常に愚禿釋親鸞述と書いてゐられます。これは反省の深さが深ければ深くなる程自分が馬鹿に見え、自分が無知にも愚鈍にも見えるからであります。しかしながら又さうだからと云つて人間は馬鹿や愚鈍に見えるから詰らないと考へてもなりません。

即ち反省して見て其の結果思ひも寄らぬ自分は愚鈍であり、無知であつた。だから反省しない方が良いではないかと考へてはならぬと云ふことであります。何故かと云ふに、自分は眞に無知だと眞剣に悟られたときは、後ろの方にか、或は心の底の方にか、どこかに、巨きな、圓かな、鏡のやうな大知識が顔を出してゐて、盛んに自分を無知だ、馬鹿だ、意氣地なしだと叱り通しに叱つ

てゐるからであります。

松の影。黒きは月の光かな。

で、松の黒い陰影が地上に匍うてゐる。仰いで天を見れば大月皎く、皎々と照り輝いて居る。黒きは、松の黒きにあらずして月の光の明かなのであります。以上の私の話で、先達も教室で言つたお咄の中で、税所敦子刀自が鬼婆さんに仕へて、まだ自分の務め方が足りない、まだ自分の世話が届かぬのだと、いつでも自己を反省し、自分を鞭たれたといふ世にも尊いお氣持が皆さんにお判りになつたらうと思ふ。

皆さん。皆さんの前途は廣く且つ多望であります。これよりは定めて多種多様のことが起つて参りませう。腹のたつこともあらう、怨めしいこと、悔しいこと、悲しみ、苦しみ等々此等感情の海の巨きな浪け、或は皆さんを溺らすことがあるかも知れません。しかしながらいつ如何なる時でも、他人が悪いと考

へてはなりません。悉く自分が悪いのです。皆自分の罪であります。そこで自分は無知だ、馬鹿だ、意氣地なしだ。何もかも自分の務め方が足りないからだ、と、本當に心の奥から考へられたとき、皆さんは餘程偉くなつておいで、あります。

自己を鞭て、自己を盡せ、そしてその心を磨け。世の中にはよく有る例であります。若い嫁さんが新しい嫁入り先きの家のことが何もかも氣に入らない。すべてについて腹が立つ、其の腹立ちの遣り場がなく、有象無象のからくたを懷ろに振り込んで里方に持つて歸り、産みのお父さんやお母さんの前に十倍にも二十倍にもして、ブチまけて同情を買はうとする。斯ういふ無反省と依頼心とが悉く皆さんを不幸に陥れるのであります。(完)

第二 貞操

1、貞操 第一

(本稿は昭和十三年十一月十九日本校創立五十周年記念本校視察會に於て朝禮を行ひ尚綱五ヶ條朗誦後學校長講話として演述したものである)

今日は、只今朗誦した尚綱五ヶ條の、一、貞操。「貞操は我等の生命なり清く、正しく、固く持て」と言ふことについてお話を致します。

私共は、言ふまでもなく、お父さんとお母さんの子供であります。私共はお母さんの子であります。これは疑ふ餘地はない。それはお母さんの胎内に宿りお母さんから産れたものであるからであります。しかしお父さんの子であると云ふには、お母さんの子であると云ふ程には參りかねる点が有ります。即ち此

の場合には、疑へば疑ふ餘地はある。又之れを疑つて書いた小説や劇が西洋には澤山ある。例へば「ストリンドベルグ」作「父」の如きであります。しかし我が日本にはない。有るかも知れませんが私は知らない。然るに私共は、お母さんの子であると同様にお父さんの子でもある。これは誰も怪しまない。誰も疑はないと言ふのは、お母さんの貞操が、疑を容るゝ餘地のない程、お父さんに信じられてゐるからであります。即ちお父さんに自分の子であると信じて露ほども疑はしめないのは、お母さんの夫に對する愛の心、貞操の力であります。父と子を結ぶ大切な信と云ふ紐は、お母さんの堅い愛と云ふ貞操の精神力によつて、確乎と結びつけられてゐるからであります。

時間に限りがありますから簡単に手取り早く申しませう。父と子供特に男の兒との關係が延長して祖先となる。延いて祖先崇拜となるのであります。父と子の關係がアヤフヤな處に祖先の觀念は起らず。祖先の觀念の不安心な處に

祖先崇拜といふやうな宗教的至上の情操は起るわけがないのであります。

さて、御存知のやうに父子關係が延びて私共の祖先となり、祖先が宗教的に淨化せられて祖先崇拜となり。之れが又押し擴められて我が家族制度となり、延いて我が日本の國体となるのであります。そこで私はいつも

母は子を産み、祖先を産み、國体を産む

と、よくさう申してをります。この言葉は、私自身で作つておきながら、如何にも快心の言葉だと思つて自惚れてゐる位であります。

されば皆さんに、何を差し措いても、貞操第一と信じて貰ひたい。これは理窟を言ふ人から故障を申されるかも知りませんが、例の休禪師が

女をば法のみ庫といふぞ實に釋迦も達磨もヒョイヒョイと出る

と歌つたといふ、それと同じ位の意味あひで、どんな尊い國体でも女といふものは産むものである。夫れが他ならぬ貞操だといふ程の意味で、私は「貞操第

一」と云つておきたいのであります。

私はつぎに常盤御前を暫くお話致します。皆さんがよく知つてゐる通り、常盤御前は、夫義朝が清盛に殺害せられ、身の寄る邊もなく三人の子供を負うたり、手を引いたりして、雪の日に伏見の里に彷徨ひ歩いた。そして遂に平家の爲めに捕へられて、夫の敵清盛の前に引き据ゑられたのであります。こゝが例の詩吟で歌ふ梁川星巖の

雪は笠檐を壓して風袂を捲く。呱呱乳を覺む若爲の情ぞ

といふ處であります。今はそんなことはしばらく措いて、兎も角清盛の目前に引き出された。そして其の意に従へと云ふ。こゝに大きい大きい矛盾が彼の女を捉へたのであります。意に従はんか不俱戴天の夫の敵である。若し否といはんか自分は勿論のこと三人の子供も惨殺されるに相違ない。そして源家の將來は永久にたより無くなる。こゝのイエスとノオとの間に板挟みになつて苦し

みぬいた處を同情して琵琶歌や劇が出来てゐて、聞く者をして袂を絞らせると云ふ次第であります。而して常盤御前は結局子供の情に惹かされて清盛の意に従つたのであつて、それで將來の義経が舞臺の上に躍り出て、源氏は目出たく再興したといふことになつてゐるのであります。

私は、こゝの場面に於て前に言つた貞操第一を提出したのであります。常盤御前にして見ると、敵清盛に従ふといふことは、身を寸断せられるより辛いことであつたに相違ない。私はこの何よりも辛いと彼の女が思ふ初一念を其の儘にして、どこ迄も我慢を張り通してもらひたかつた。即ち此の厭だと思ふ想念こそ所謂天衣無縫の純粹感情、純粹思惟と云ふものであつて、これをあゝも思ひ、かうも思ふ雜念妄念が、尊い清い、純な思念を亂し疵つける、寧ろ凡てを諦めて子供と一緒に首を伸べて、夫と同じ運命の下に悪魔の毒刃を甘受したら、どんなものであつたらうか。私共はどこまでも、尙綱五ヶ條に言うてある

やうに、

貞操は我等の生命なり。清く、正しく、固く持て
と叫びたいのであります。

そして常盤御前の末路はどうなつたかと云ふに、間もなく清盛に飽かれて、
再び出て他人に嫁したと云ふではありませんか。こゝの處を、吉田松陰先生は
其の著「武教講録」に

「常盤、清盛に従ふは尙ほ恕すべし。出で、人に嫁するは何事ぞや」
と云つて責めて居られます。

私は、さる處で斯んな昔話を讀んだことがあります。戦國時代の名將蒲生飛
彈守氏郷は、不幸にして早世したのであつたが、その夫人は信長の娘さんで才
色がありました。そこで太閤秀吉の御召し出しに遇うたのである。若し否と云
はんか、出羽百萬石を棒にふつた上、一子秀實は放浪の身とならなければなら

ぬと云ふ退引ならぬ羽目に陥つたのであります。蒲生家の重臣共は口を揃へ
て太閤の御意に應ずる様に勧めたのであつた。夫人は頑として聞き入れない。
お前達迄がそんな情けないことを言つて呉れるのは残念でたまらないと言つ
て、遂に太閤の命を斥けて、剃髮して尼になつて終つたと言ふことでありま
す。

何のその百萬石も笹の露

と言つた俳人の意氣は、恰もこの夫人の氣魄を歌つてくれた様な心持ちがして
なりません。

近頃私は、次ぎのやうな新聞の記事を讀みました。或る女子師範の卒業生が
あつて、其の貧窮なのを歎いて、身を賣つて弟の學資に充てようとしたと云ふ
のである。これはとんでもない、古い、汚い思想であります。貞操はいつでも
第一でなければならぬ。然るにこれを賣つて金に替へるなら、大切な貞操は忽

ちにして金銭以下の第二位、第三位に蹴落されて、お金第一となるではありませんか。私が弟でありましたら「姉さん止して下さい、そんな金は私には要りません。よしんば私が、大臣になつたとて、大將になつたとて、姉さんの身代金で出来た大臣や大將なら汚いことだ。私共の如きは、どうなつても可いにしても、此の大切な日本が穢れます。それよりも、私は葉つ端の小役人で可い。小商賣でも、細農でもかまはない。清く正しく生きて行きたい」といつてやりたい。

私は尙ほ最後に一言します。尙綱五ヶ條の中の「貞操は我等の生命なり」と云ふ處を言ひ換へて「貞操は我等國家の生命なり」と申したいのであります。(完)

2、日本婦人の長所—貞操性について

(本文は昭和十五年六月七日午後三時より三時二十分まで二十分間

に亘り熊本本局より放送したもので、次項の「敬と愛」との條下所載のものと前半を同じくしてゐる。けれども元來其の目的を異にして居るので、後半は大部分後者と其の所説を異にしてゐる。仍つて別にこゝに項を改めて掲げておく)

日本婦人の長所といつても澤山ありませう。又無ければならぬと考へられます。その中に就いて、本日は、日本婦人の婦徳、即ち婦人の徳と致しまして、いつも温良貞淑と申されて居ますが、其の貞淑即ち我が邦婦人の貞操性に就いてお咄致して見たいと思ひます。

男女の關係は、云ふ迄もなく結婚であります。結婚生活の理想と致しましては、昔から同心一躰といふことが謂はれて居ります。心も身体も一つに歸すると言ふ意味でありませう。さて、結婚直下新郎新婦、一軒の家に住みまして寢食を共にし、聽て子供が産まれる。即ち夫婦一躰と成るのであります。身

体の方から言ひますれば、之が即ち目的とほりの一體であつて、此れより以上はないのであります。

しかしながら、身体の方面から夫婦一體が、かたち作られると同じ様に、又同時に、精神の方面から夫婦同心即ち心が造作なく、同心一如に成り得るかと言ふに、精神、心に到りましては、身体のやうに、さう容易く同心とは成り得られない様に考へられます。即ち結婚後と雖も、新郎新婦兩者の魂は、百里も千里も離れて居ると想像せられます。此の双方に遠く離れて居る一條道を男女兩極から、一步一步近寄つて參るのであります。此の長い道すがらが、即ち夫婦道であります。

この夫婦道を、夫も歩み妻も同様に歩むのでありますが、此が並大抵な難行路ではありません。私は、此を一日一步、即ち一日かゝつて一步踏み出す。そして一步あゆみて一息喘ぐ、一步一喘と申して居ります。困難な道を喘ぎ喘ぎ

迎るのであります。

斯様な至難な難行路を、今頃の若い人達は、平氣な平坦な道路でも歩く如うに考へて居るのではないでせうか。と言ふよりも、寧ろ享樂氣分の鼻歌で通れるやうに考へ勝ちではないかと考へます。そして現實にぶつかつて、さうも參らぬ處から、失望と落膽に陥り、可惜人生を灰白色に仕て了はぬとも限らないのであります。

斯様に、夫婦道の精神の行路は、二十年三十年と頗る長い難行路であります。此の精神道を歩くのに、矢張り私共の足の様に、二本の足が入り用なのであります。此は何人でも、能く言はれて居る通り、敬と愛との二本脚であります。之が達者でなければ一尺でも一寸でも進むことは出来ません。長い間の是の歩みに由つて、夫婦兩つの魂は互に歩み寄り、其の夫婦道の中間に於て一つになり、所謂同心一如と云ふ理想境を完くするのであります。

さて斯様に致しまして、斯の夫婦同心一如の理想境に達した以上は、如何なる強力を以てしても、如何なる境涯に持ち來されましても、もう離れない所謂金剛不壞の妙境になつて參ります。此が身体でありますれば、強い剛力が引き離せば、離れないことはないのですが、そこは、物質界と精神界との相違する点でありまして、兩者の精神が一如に歸した以上、如何なる魔の力を持つてしましても、金輪際分離致しません。例へばお金持であつたものが、急に貧乏になりましたも、又は夫が悪い病氣に冒されて、側で見て居れない様に痛々しい状態になりましたも、或は又悪事を働いて兇狀持になりましたも、其の間に龜裂を生ずることはありません。最も極端な場合を想像致しまして、夫が病氣其の他で死んで亡くなりましたも、兩方の魂が一如となつた以上、妻の魂の中には死んだ夫の魂か其の儘生きて居りまして、之を無視することは出来ないであります。此の境地を昔から

忠臣二君に仕へす。

と並稱致しまして

貞婦兩夫に見えず

と申します。

しかし私は、こゝで婦人が不仕合せにして、再婚三婚する場合が勿論有りませうが、それを否定しようとするものではありません。場合に由つては、幾婚致しましても、止むを得ない場合は屢々ありませう。併し何れに致しましても、此の貞婦兩夫に見えずの婦道の眞理を妨げるものではないと信するのであります。私は、私の知人の方で、世に怖る可き病氣に惱まされてお出になる良人に仕へて、婦道を盡された尊い御婦人を承知してをります。しかし、餘り立ち入つた咄は止めに致しまして、私は次の如うな咄を聞いた儘にお話致ませう。或る刑務所であつたことではありますが、其の刑務所の門前に、毎日毎朝、一

人の見すばらしい姿をしてゐる婦人が、小さい子供の手を引いて立ち現はれ、正門に向つて御辭儀をし、子供にも敬禮をさせて歸つて行く。雨の日も風の日も一日も缺がさない。門衛が不思議に思つて搜つて見ると、一囚人の妻と子が獄の内の夫と父とに、「お早う御座います」と御挨拶を爲に来るのであつた。このことを囚人に咄すと、泣いて顔を上げ得なかつたと云ふ。此はさる典獄さんの咄したことださうでありますから、嘘のことではあるまいと思ひます。

次に私は、夫婦道を、敬と愛との二本脚で歩み寄ると申しましたが、愛の方のことは暫くおいて、敬について一言謂はせて頂きたい。

敬は申す迄もなく尊敬であります。人間の人格に對する尊い感情でありまして、妻は勿論夫に對して尊敬するのでありますが、我が國の風俗と致しまして妻が夫を尊敬すると同様に、夫は又妻に對して等しく尊敬が拂はれて居るか、どうか。勿論そんな場合も多々有りませう。有ることを疑ひません。しかしな

がらさうでない場合も、仲々少ないことを遺憾に思ひます。それは婦人の人格が低いから當然だと言つて了へばそれ迄であります。嘘の咄か本眞のことかよく知れませんが、或る小學校の先生が、父と母の名前をお調べになりました。すると、或る一人の子供は隙かさす立ち上つて、先生！ 私のおつ母さんは「オイ」と申されます。と叫んで、流石に先生を苦笑せしめたと言ふ。妻を呼ぶのに、「オイ」、「オイ」と云ふ呼び名は、敬意を表した言葉ではありません。

それに就いて私は斯様なことを考へます。それは、日本では偉人や傑士の母や妻に、名前を見出さないことが甚だ屢々であります。私の調べた所に間違がありませんでしたら、先づ第一に、菅原道真公の母に名前が見當りません。次に楠木正行公のお母さんに確實な名がありません。申す迄もなく正行公の母は、正成公の妻でありまして、天晴れ正行公に教訓を垂れ、忠勇義烈の小楠公

を産み且つ人となした世にも稀なる賢母であります。しかし、是に判然としたお名前が備はつて居りません。或る人は久子さんと申します。或はある場合には滋子さんとも呼ばれて居る様であります。しかし此はたゞ後世勝手につけた名前に過ぎぬらしいのであります。さればこそ、小學校の教科書にも、たゞ母と記してある丈で、菅公の母にしても名前が記してないのであります。それからまだある。菊池武時の妻、山内一豊の妻、木村長門守重成の妻、上毛野の形名の妻、比々皆然りであります。しかしながら之は又別の方面から、露骨に名前を云ふよりも、母や妻と云つた方が、親しみもあり、床かしさもあり、尊さもあると言ふのならそれ迄であります。ことによると、我が國の長い間の習慣として、「オイ」オイで無頓着に通つて來て居るのではないか知らん。若しさうだとすれば残念なことだと思はれてなりません。

皆さん、私は以上咄して參りますと、奇態な自家撞着の言葉に出くわせま

す。夫れは前述のやうに、日本では有名な婦人に名前がないと言ふことで、有名だが名がないといふことになります。しかして之れは笑戯れでも戯談でも皮肉でも何でもない儼然たる事實であります。これで幾千年の間續いて參りまして、男性も女性も、格別不思議に思はない。普通のことになつて參つてゐるのであります。

併し乍ら、猶ほよく考へて見ますと、これが日本婦人の尊い傳統精神ではないかと思ひます。即ち名前も要らぬ、権利も要らぬ、只黙々として良人に奉仕し、子供を哺育する。言ひ換ふれば良妻賢母が最高であり一切であると言ふ様に、婦人の使命を解して來た。又事實、西洋の婦人の如うに婦人が名を擧げることを考へたり、権利を要望したりするのでは、大切な婦人の清純な心は、筈のやうに亂れて混沌たるものになつて了ふ。詰り、日本の家族制度と云ふものは、婦人を中心として斯んな風に涵養されて來た。私は以上の様に考へるので

あります。そこで、私は斯う申したいのであります。多くの場合、我が邦では妻に對して良人の方が、敬と愛との二本の脚を程よく使うて居ない方が相當多いのではないか。であるから、夫婦兩方の魂の歩み寄つて同心になられるのは、夫婦道の真ん中即ち中間ではなくして、ことに由ると良人の足許の邊りで、一如になつて居られる場合が多分にある様に考へられるのであります。

この歩み寄り即ち刻みの程度に、貞操と云ふ名を附けると致しますと、私は、我が日本婦人の男性に對する貞操の優越性を叫ばずに居られないのであります。

しかして、前申しました、忠臣二君に仕へずの標語を指して、忠節と申しますれば、後の貞女兩夫に見えずを貞節と呼び、そして此の忠節と貞節との交叉点を氣節として、昨年五月御下賜になり青少年學徒に賜はりました勅語の氣節を尙び、廉耻を重んじの御言葉にお對へ申し上げたいと思ひます。

茲にお断りしておきたいのは、此の忠臣二君に仕へずの語と、貞婦兩夫に見えずの言葉は、支那の史記か何かに出て居る言葉ださうでありまして、特に忠臣二君に仕へずと言ふのは、明かに封建時代の武士の道德の様に考へられませす。しかしながら其の誠心に到りましては、昔も今も少しも變りはありません。倒の佐賀の葉隠武士の精神である、「武士道とは死ぬこと、見つけたら」で明治天皇から賜はつた軍人勅諭五ヶ條の、「一つ軍人は忠節を盡すを本分とすべし」と仰せられた。其の御精神に於て、何れも變りはないと思ふのであります。

或は、ヒョツとすると、近頃の若い人達の中には、此の兩つの標語の如きは古臭い黴の生えた江戸時代の女大學式だと言つて、嘲み笑ふものがないとも限りません。若し斯様な御婦人がありましたら、謂はゆる新らしい時代の歪曲した歐米流の個人主義的女子教育の中毒作用の影響であつて、誠に輕薄至極な心

の有ち方の人であります。

最後に申したいのは、以上申して來ました夫婦の和合關係は、只一家の一小事の様に考へてはならぬことであります。夫婦間の貞操關係は實に國家社會の重大事實であつて、只一家内の一小些事として輕率に考へてはなりません。されば教育勅語にも、夫婦相和しと仰せられ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべしと御結びになつてをります。即ち夫婦間の和合が皇運扶翼になるのであります。しかし夫れが何故にさうなるのであるかは、時間の關係上、只今御咄申上げる譯には參りません。これで私のお咄を終りと致します。(完)

第三 敬 と 愛

(さる結婚式に於て述べた祝詞)

(前略) 結婚とは、人間の半分である男性と、同じく半分である女性とが、身も心も一體となつて家を構成すると云ふことであります。

然るに、世間多くの若い人々は、輕率にも結婚式を擧げた其の時から、もう夫婦は一心同躰であると早合点しようとする。これは甚だしく間違つた考であります。

成程一家に住うて子供が産れる夫れで身躰は一體となつた。さう考へても宜しいかも知れません。しかし精神はさう手輕には參りません。結婚式は男女兩つの心が一心一如となる機縁を作つたと云ふ丈けで、決してそれ以上ではありません。ご兩人の精神は、結婚前と同様に結婚後に於ても、千里も万里も離れ

てゐる。この遠くかけ離れた道の兩極から、一步一步と近寄つて來るのであつて、この進行の道程が所謂夫婦道であるのであります。

さて、この夫婦道の進行は決してなまやさしいものではない。私は、これを一日一步、一步一喘と唱へてをります。その道の困難なことを形容した言葉であります。そしてこの歩み寄る精神力の兩つの脚を敬と愛と致して考へたいのであります。

さて、愛は圓い。愛は可動であります。進み、又退く、左右に外れ轉々と軌道を飛び出さうとする、飛躍的ではあるが動もすると無軌道的であります。愛には往々目がない。そしてなかなか危険であります。

敬は四角であります。法であり、道である。敬は自己の地位に佇立し、自己の座を確保する。敬は人格的の眼を開いて對者を仰望します。兎に角敬とは、絶對者の前に於て自己を省察し自己自身に反る靜的態度であります。

斯くて敬と愛との歩みに由つて、兩つの靈は、一步一步と夫婦道の上で接近するのであります。

この敬と愛との兩つの脚に由つて運ぶ行進を纏めて犠牲的精神と名づけます。犠牲的精神とは佛教によく謂はれてゐるやうに、己れを空にする、とだといへば早道でよく判る。さうして普通犠牲的精神とは大そう大事件のやうに説かれてゐるけれども、決してそんなものではない。ほんの手近く足許にころがつてゐるのであります。

例へばお聲さんは鹹好きで、お嫁さんは甘好きであつたとする。お嫁さんが毎日三度づつお料理をなさる。自分自身は甘く甘くと主張する。お聲さんの方からは鹹く鹹くと要求なさる。さてどういふ塩加減にすべきかといふやうな簡単な處に、犠牲即ち己れを空にすると云ふ崇高な精神が宿つてゐるのであります。斯くて夫に宜いやうに、夫の好きな様にと氣を配りつゝ一步一步と近寄つ

て往くのであります。

斯様に一步一步と歩み寄りの生活が三十年五十年と續く、さうして所期の心身一体一如と言ふ所の人生の至境に到達するのであります。

さて、足一步この一心一躰の境に踏み入ると、これ迄の様子とはカラリと違ひ、如何に強大な物力でも、精神力でもこの一如になつた御夫婦を引き離すことはむつかしくなつて參ります。急に貧乏になつても離れない。病氣になつても離れない。死ぬると云ふやうな一大事實がこれを阻隔しようと致しましても之を分離させることは出来ない。この境地を古來

忠臣二君に仕へず。

貞女兩夫に見えず。

といつて、忠と貞と兩者を極度に賞讃してゐるのであります。

しかしながら斯うはいふけれども、敬と愛とは、單に性的にのみ限られたこ

とではない。人間と人間との交渉は凡ての場合に於て、敬と愛との道德的規範以外には出でない様に考へられるのであります。家庭内では勿論のこと、世間との交際でも、どんな職業についても同様であります。されば古語にも、

君子の道は、端を夫婦に造す。其の至れるに及んでや、天地に察かなり。

と云つてあるのであります。將來どんな方面に何ういふ活動をなされましても、夫婦の間の治まらざるは不成功の基だといふやうに言つてあるのはこのことだと考へられるのであります。

私、以上述べましてこの新御夫婦の譬へやうもない好配偶であらせらるゝことをお歡び申上げ、且つ將來の御發展御活動を祝福致しまして祝辭と致します。(完)

第四 勤 と 儉

(本校に於て二十年間實施して來た夏期の勤勞と節約生活を細叙して、この項の説明に代へる)

本校に於ける夏期の施設は、大正十一年夏より本年(昭和十六年)に到る迄二十年の長期に亘つて實施して來たことであるが、今では學校の常例行事の一つとなつて、夏は家事に精を出すもの、親に孝行するものと學校も言ひ生徒もさうした氣持になつて、生徒自身呼んで働きの夏休み、親孝行の夏休みなど言つて居る位である。

1. 暑中の勤勞作業前記—準備作業

(1)

元來、學校の仕事特に當今の女學校の教育は、學校で修めた學科と生徒の實際生活とが、切れなくになり勝ちで、動もすると少しも連絡が取れてゐないことが屢々である。その爲めに折角學習された學科が仕事となつて生きて來ず、仕事が又學問に由つて生かされてゐない。詰り學習と實生活の双方とも絶縁せられて共に死んでゐると云ふ處に行き詰りが生じてゐる様に考へられる。

其の間に當つて、少々ながら息の通うてゐると考へられるのは、まづ裁縫科と家事科の兩つ位のものであらう。中について裁縫は兎も角もとして、家事科になると、もう少々怪しくなる。學校でやる割烹も所謂學校割烹で、家事教科書はたゞ單に家事教室の難かしい記憶の材料たるに過ぎない觀がある。況して其の他の學科に於てをやである。何とかして此の溝に橋を渡す工夫はないものか。以下述べてゆく學校の目標は主としてこの點にあるのであつて、つまり學校で學習した頭の學科を手の仕事に翻譯しようとする、知と行との合一點が學

校の狙ひ所である。

(2)

さて以上の目標を果す爲めに、第一學期（四月より六月迄）に於て第四五學年の家事教科書等の學習順序を変更する。

1、第四、五學年に於て、家事教科書の豫定順序を変更して、學年の終りになつてゐる家計簿の取扱ひを引上げ第一學期に於て學修せしめる。

2、第一、二、三學年に、簡單なる總菜料理（例へば御飯焼き、味噌汁の立て方等）を實習せしめる。

3、第一學期に於て來客接待、應接等の作法を教授若くは復習する。

4、毎年盲啞學校の専門教師を聘してマツサーヂの練習を爲す。（第一學年には新教授であるが、二學年以上には既修事項を復習せしむることゝなる。）

(3)

次に、休暇前一週間を特に自力更生週とし、學校全部總動員で、諸般の行事を引き締めるのである。是れ、季節が段々暑くなるのと、學期試験が終了して心身が弛緩し易いのと、且つ休暇が近寄ると云ふので氣が緩み勝ちなものと、種々の事情が一緒になつてやゝともすると弛緩氣分に墮ち易く、緩み心の者に夏休に入つたから直ぐ働けといふやうなことは、むつかしいことだと考へたからである。そこで職員間で左の様な職員相互の申し合はせを行ふ。

1、毎朝遅刻せぬこと。

2、始業合圖があれば猶豫せず直ちに教室に入ること。

3、時限終りの合圖ありたるときは、即座に授業を打ち切つて退場すること。

4、週番職員を倍加して、三名を六名と爲すこと。

以上の通り堅く約束し、且つ更生週第一日から、毎朝學校長より簡單なる訓話を生徒に與へる。今左に昭和十四年即ち一昨年夏の實例を擧げて見よう。

(4)

七月十四日——話題「毎朝一番起きについて」

今年(昭和十四年夏期)は昨年まではなかつた一番起ききの項目を新たに加へました。一年の計は元旦にあり、一日の計は朝にありとよくいふが、私は更に朝の計は一番起きにありといひたいのであります。お母さんよりも先きに、姉さんよりも、若し下女がゐたら下女よりも先きに起きるのです。皆さん、ナンの下女などに負けてなるものかといふ、日頃の負け嫌ひの氣魄は、かういふ時に出すものです。さうして先づ冷水摩擦を始める。身繕ひをして炊事に取りかゝる。やがて他の方が起きて來られる、と、お早う御座いますの御挨拶を交す。用意が總て整うた所で朝の食卓に向ふのです。自分が先登第一に起きて、自分

の手で食膳全部を整へ、食禮(食禮とは食前合掌して「有難く感謝して頂きませう」と唱へる規定になつてゐる)を唱へ、和容暢語皆の者を接待する。何と云ふ和やかな風景でありませう。平和の朝の氣分が食卓一杯に満ち溢れて零れるやうに感ぜられる。

この處を吉田松陰先生は、武教講録の「夙起夜寐」の章に。養氣の根本を説いて。

「浩然の氣を養ふは、平旦の氣を養ふより始まる。夙に起き、盥嗽し、櫛り衣服を正し、用具を佩ぶ、皆平旦の氣を養ふ方法なり。君の恩情を躰認し、今日の家業を思量し、孝の終始を觀るに至つては、最も養氣の根本たり」といつてゐられる。浩然の氣と云ひ、平旦の氣といふ文字は、むつかしいけれども、むつかしいのは文字の上だけのことであつて、皆さんがすがすがしい朗かな、何とも云へない良い氣分だと思へば、文字の意味よりも先きに浩然の氣

分を体験するわけであつて、文字は唯々この氣分に名づけた丈けだと、承知すべきであります。

七月十五日 話題「マツサーヂについて」

マツサーヂは本校の最も重要視する所でありまして、一年生から五年生まで土曜日曜にかけて盲聾學校の専門の先生に態々來校を願つて教を受けて來たのであります。五年は六回、四年は四回、三年生二年生、夫れ／＼毎年稽古をつゞけて來たのであります。

しかし、一學年の方は土曜一回のお稽古に過ぎないのであつて、まだ業も氣分も幼稚でありますから、家事の先生が手を取るやうにして教へて來たのであります。しかし毎年のこと夏期に入ると、未経験の一年生は、實際はどんな模様であつたか知らと心配するのでありますが、事實は心配を裏切つて、一學年が仲々氣負うて實行すると云ふのが例となつてゐて、とても御両親に喜ばれて

ゐるのであります。試みに昨年の記録を讀んで見ると、

お母さんの筆で

「よく出来ます」

と書いてあるから、此の生徒自身の書いた感想記録は、何うであらうかと調べて見ると、

「私が下手なのに、上手の様に褒めてさも心地好さうにして下さるので本當に嬉しかった」

とあります。更に四年生の處で、矢張りお母さんの手記で、

「疲れた身体をマツサーヂして貰ふ時のみ子を持った嬉しさをつくづく感じます」

とありますから、同様生徒自身の感想を調べて見ると、

「マツサーヂは時々母に爲て上げたが、いつも斯んなに甘へる兒だけれど、

こんなにして貰ふときは子を有つ親の有難さがわかると云つて居られたのが始終胸裏にこびりついて忘れられませんでした」

皆さんの、親さんや御老人さんに盡さうと思ふ熱情が指端に溢れて、御両親方の肺腑に浸み込むのです。さればマッサージは必ずしもその術の上手、下手ではない。誠心を盡す精神にあるのです。身体のマッサージと同時に心のやはらぎのマッサージであります。

七月十六日 話題——「働くこと云ふこと」

この夏期には種々のことが澤山皆さんに要求されてゐるが、其の要求の中心點は矢張り毎年のやうに働くこと云ふことである。四年五年の上級生は、もう一人前あり、元氣盛りの年頃であるから、働くのは當然でもあり、又昨年迄も立派に働いて來てゐるのであるが、何と云つても一年生と云ふ處は、實の處働けるかどうかと毎年心配致します。處が、どうしてどうして、心配どこ

ろの話ではない。昨年の洗濯物の數などは、一學年が最高の記録を作つてゐるのであります。これは種々の原因があるであらう。一年生は、裁縫もまだまだ幼稚であり、張物なども充分には出來ない處から、一生懸命に洗濯にかゝつたと云ふので、斯ういふ風に優れた成績が得られたに相違ないのであります。しかし十分に脂が乗つて來ると、一年二年といふ處が、驚く可き記録の保持者であつて、私共はつくづくいつまでも小供であるといふ考へを有つてはならぬと考へるのであります。左に昨年の成績を擧げて見ると、

1、洗濯（ハンケチの如き小布片を含みます）

最多數——七九三枚（一丙） 次位——七四一枚（一乙）

第三位——七二二枚（二乙）

右は個人としてあるが、級全躰の平均としては

最多數——三五六枚（一丙） 次位——二九六枚（五乙）

第三位—二八六枚(五甲)

2、裁縫

最多數—三八枚(五甲、五丁)。次位—三三枚(五丙)

第三位—二六枚(二乙)

級全躰の平均としては

最多數—九、三(五丁)。次位—九、一(五丙)。

3、張物

最多數—四四反(五乙)。次位—三五反(一丁)。

第三位—二九反(二丁、五甲)

級全躰の平均としては

最多數—六、〇反(五乙)。次位五、七反(五丁)。

第三位—四、五反(一丁)

右の通りになつて居て一、二年と云ふ處が仲々侮り難い成績を現はして居ります。凡て働くと云ふことは、口でいひ、特に右のやうに數字に示すと、何の造作もないやうであるが、實際働く人にとつてはなまやさしいことではありません。それで、最初は誰でも臆劫に感じられるに相違ないのでありますが、この峠を乗り越すと夫れ程苦痛には感じなくなる。そこをもう一步前進すると、働くのが面白い、楽しいと言ふところ迄こぎつけることが出来る。此處が仕事の妙境であります。

昔、支那唐代の禪僧百丈禪師は、一日働かざれば一日食はなかつたといひます。働かない人は、人の働きに由つて穫つたお米を食べて生きてゐる資格がないのであります。それで働くといふことは生きるといふことであつて、文字は異ふが同じ意味になるのであります。で、つまり働かない人は死んでをるといふことになるのであります。

七月十八日 話題「腹を立てぬことについて」

昨日は働くといふことについて、そのどんなに大切なことであるかをお話しました。しかしそれと同時にこの腹を立てぬといふことが又非常に大切なことでもあります。なぜと云ふに、朝早く一番起きが出来ても、洗濯や裁縫がどんなに澤山仕上つても、一度腹立ち顔を見せると御両親の不機嫌を買ひ折角の骨折や手柄が忽ちにして根本から崩壊して了ふからであります。であるから此の働くと云ふことを生かして行かうとするには、何はおいても軟かい平和の氣持でかしづいてゆかなければなりません。さうでないと自分の爲めに働いてくれたといふ感じが、しつくりと人様に起らないからであります。されば昨年の例を調べて見ましても随分苦心して、腹が立つてもデット我慢し辛抱して、十分に内面の苦闘を味つた人が少なくありませんでした。中には自分の室に走り込んで、どんな顔で怒つてゐるかを鏡に向つて見た人もあり、或は腹の立つた瞬

間校歌を口の中で歌つたといふのもあり、或は朝禮の黙想のときの様に、一つ二つと數をかぞへて胸の風ぐのを待つた人もありました。中にも學校への回答にお父さんの筆で斯んなことが書いてあるのがありました。

「私共が多忙の餘り、會釋わるく仕事を命じ荒々しい言葉を用ゐることもありました。腹を立てる様子もなく、時によるとブンとするときもありました。が、直ぐ反省すると見えて、次の瞬間には笑顔を見せて内心苦闘するのがあり」と見えました」

しかしこんなのは實際は中々少なく、立腹の仕つ放しが随分多い様であります。腹を立てると云ふことは、どんな教にでも戒むべき大切な一つとしてあるが、佛教はこの點で徹底してゐる様であります。

佛教では、貪ること、道理の判らぬこと、そして此の怒りと云ふことの三つを貪瞋痴の三毒と稱へ、特に憤怒は毒中の毒とし、之を犯せば地獄に墜ちると

してあります。地獄の繪は皆さんが能くお寺などで見る所で、赤鬼や青鬼が慘酷無類のことをして私共を責めさいなんです。しかし何ぞ圖らん赤鬼や青鬼は自分を責める悪鬼ではなくして、自分自身がもう既に悪鬼や夜叉になつてゐるのであります。

私が常に腹を立てる前に、「チョツと待て五分間」と言ふ標語を教へて、直ぐそれを思ひ出すやうにと言つて居るのも、また斯んなときには起つて行つて鏡に向つて自分の顔を眺めて見よと言つてゐるのも、みなこのことでありまゝ。斯んなときに氣を換へて、かりに鏡に向つて自分の姿を映してご覧なさい、自分の顔が飛んでもない鬼の如うな醜い面になつてゐて、眉は逆立ち、眼は險になり、口は歪み色は赤くなつたり青くなつたりして居る、全く怖ろしい鬼面の相であることを發見するであります。

七月十九日 話題「家庭合理化の實驗」

本校でも十數年前の最初の夏の働きといふものは、比較的簡單なものであつて、洗濯の枚數とか、裁縫の枚數とか云つた様に洗つたり縫つたりする枚數も單に數量の多いことを争うた觀がありました。しかし經驗を積むにつれて、仕事の量と同時に其の仕事の手際の善惡精粗といふ質に着眼する様になりました。その爲め昨年など皆さんは、洗濯にしても便所掃除にしても、如何にして綺麗に立派に仕ようかといふことに心掛けるやうになつて來たのは、何と云つても働きの上の著しい進歩と言つてよいのであります。

本年は更に一步を進めて、家庭生活のホンの一端ではあるが、寒暖計を用ひて、生活合理化を圖つて見ようと考へ、その爲めに寒暖計を百二三十本買ひ入れて、五學年の方々へ貸し與へるやうに仕たのであります。

從來とても家事科と理科との學科の連絡については、幾度か考へたのでありましたが、學校の教室内では、どうしても旨く行かなかつたが、今度は家事と

理科と家庭生活との三つを合流させ、家事科と理科との兩脚を家庭の上に据ゑつけて見て、見事に立つか立たぬかを研究して見ようとかゝつたのであります。皆さんの努力一つで成功もし、不成功に終りもする。しかし女學校のお稽古は、斯んな處から始めなければならぬと私共は確信するのであります。

例へば指導書に示してあるやうに、井戸水の汲立てのものが何度と測る。これを日向に曝して何度に上つたかを見る。さうして兩方を暖め身体に適した一定温度に沸かして薪が幾本違ふかを實驗するのです。どうか皆さん此を詰らない事だと考へないで下さい。これ等のことはあなた方の考へるよりも遙かに遙かに價值のある研究であつて、本校では今年成功しなければ又來年やる、來年いけなければ明後年やる。何年でも纏まつた結果が得られる迄繼續する考へであります。

七月二十日 終業式々辭話題「誠と云ふこと」

仕事と云ふことが誠と謂ふことである。特に仕事に精を出すと云ふことが誠の表現だと云ふことについて云つておきたい。

誠と云ふ字は、言扁に「成る」と書いてある。言扁といふのは言葉とか心とか云ふことで、これを完成するのが「誠」である。完成するときは手足を勞する仕事であるから、つまり心で思つたり、言葉で云ひ現はしたりしたことを仕事化させることが誠と云ふことになるのであります。

思ひ返せばこの一學期を通して皆さんが學習したことが左側の言扁に當る。即ち一學期の成績が左側の半分であつて、夏期の仕事が右側の「成る」のつくりであります。これが一字に纏まつて「誠」と云ふ字を完成するのである。誠と云ふことは、皆さんは小學校の一年の時から耳に聞きふるしてゐることであらうが、これを非常にむつかしいと思つたり、或は天上の雲の上の遠い處にある様に考へ違ひをしないやうにしなければならぬ。誠は私共の足許にある。と云ふ

よりは寧ろ私共の心の中にあるのです。この心の中の誠心を現實にする仕事、これが即ち誠である。大學に「中に誠あれば色外に形はる」と云ふ古い言葉があるが、心の中の誠心はその半分であつて、これに外に形れる半分が加はり添つて。誠と云ふ字が出来上るのです。

私は先刻誠と云ふものは遠い處にはない近い足許に有るものだと言つたが、たしか二宮尊徳先生であつたかと思ふ。或時先生が御飯を食べようとしてお漬物を命ぜられた。そこで女中が命ぜられた通りに漬物を運んで来たのでありません。先生は、何心なく箸を執つてそれを挟んで食べようとなさると、澤庵のお漬物がよく切れてゐなかつたと見えて、ぞろ／＼と破れた提燈のやうになつて持ち上つて来ました。斯様なときに黙つて了はれるやうな先生ではありません。直ちに女中を喚び返しました。そして此の漬物は何で切つたかとお問ひになりました。女中は怪訝さうな顔色で、ハイ庖丁で切りましたと答へました。

先生はこの返答にキツとおなりになつて、庖丁で切るからよく切れないのだから切れと仰つたと云ふ逸話が残つてをります。皆さんの心の誠と云ふものはお漬物を切る、切り加減にも宿つてゐるものだと思つて貰ひたい。

さて皆さん私共の尚綱精神は、正さしくこの働くと云ふ處に有るのです。「錦を衣て綱を尙ふ」と云ふが、錦即ち誠心は内に秘んで隠れて居る。しかし隠れてゐて遂に表面化しなければ尚綱精神にはならない。内面の錦の光りが綱を通して美しく外面に映發する。これが即ちお仕事であつて尚綱精神であります。

されば誠心なければ仕事なく、仕事なければ誠なしで、内の誠と 外の働きとは一枚の紙の裏表と云つてよいのです。詮する所私共の尚綱精神と云ふのは働くことで、心と身軀との合一した點であり、それが又誠であると承知してもらひたい。

以上で勤勞作業の前記を終る。そして各種目の課題を列記して家庭に手交するのである。これが家庭宛の手紙であるが、左にこれを収録する。

拜啓左記御回答に及び候也

(保護者より學校宛回答用紙)

記

一、本紙は全部七月二十日夕食後生徒自身で讀む様申し聞かせおけり間違なく讀みましたか、

二、朝の一番起きは出來ましたか、

上 (一日も缺けず)

中 (斷續的)

下 (一回も行はず)

三、朝「お早う御座います」の挨拶は出來ましたか、

(以下、度数にて決定せざる出來榮等の上中下は御心持にて御判定のこと、しかし不要の項を御消し下されたく、尙御感想は精しく御記載願ひたし)

上 (一日も缺けず)

中 (斷續的)

下 (一回も行はず)

(感想)

四、返事につきて

1、気持ちよく輕快に出來ましたか、

上

中

下

(感想)

2、返辭と共に直ぐ立ち上りましたか、

上

中

下

(感想)

3、命ぜられた仕事は入念に仕遂げましたか、

上 中 下

(感想)

五、少しのことに腹立てる気色はありませんでしたか、

上 中 下

(感想)

六、冷水摩擦若しくは乾燥摩擦は繼續實行致しましたか、

1、冷水摩擦 (但し病氣の時を除き)

上 (一日も缺げず)

中 (斷續的)

下 (一回も行はず)

(或は行はうと云ふ意思さへなきもの)

2、乾燥摩擦實行

七、個人實行條目を左に列記ありたし、

(感想)

1、

2、

3、

4、

實行成績

上

中

下

(感想)

八、各種仕事、

1、裁縫仕上げ

イ、枚 數 (枚)

ロ、出來上り成績

上
中
下 (感想)

2、衣類洗濯(ハンケチの如き小布片を含まず)

イ、枚 數 (枚)

ロ、出來上り成績

上
中
下 (感想)

3、張り物

イ、反 數 (枚)

ロ、出來上りの成績

上
中
下 (感想)

4、割 烹 (此れは第五學年に於て學校にて教へられたる特殊品目につき

ての記録——日常の惣菜を含まず)

イ、度 數 (度)

ロ、出來上り成績

上
中
下 (感想)

5、マツサーヂの實行

上 (極めて熱心に行ひたり)
中 (稀に行ひたり)

下（一回も行はず）

（感想）

6、便所掃除

上（毎日若しくは隔日に行ひたり）

中（休中二三回行ひたり）

下（一回も行はず）

（感想）

九、家事經濟の家庭的實習、

（特に第四、五學年にて）

1、家計簿は

イ、受持ちたりしか

ロ、受持たざりしか

2、家計簿の受持は

イ、全部なりしか

ロ、一部なりしか（例へば臺所のみ）

ハ、夏休中繼續せしか

ニ、中斷せしか

3、家計簿の成績結果につきての感想

イ、感心したと思ふ點

ロ、結果不良と思ふ點

二〇、作法實習につきて御感想承りたし、

1、自分より進んで實行しましたが、

2、時々しか實行しませんでしたか、

3、全く不能か、

4、出來榮えは、

上中下
(感想)

5、作法についての家庭の御希望は、

年 月 日

第 學年 組第 號(生徒氏名)

(保護者御氏名及
生徒との續柄)

第 學年 組擔任

殿

(6)

尙ほこの手紙に就いて断つておきたいことがある。それは其の第一行に、「是の手紙の全文を二十日の夕食後食卓上にて讀むやうに命じおけり。讀みましたか」とある。これが準備作業として大切な一項となつてゐるのであるから

少し許り説明を致しておかねばならぬ。

家族一同が夕方の食事を終り全部列座の前で、この與へられた手紙を生徒自身で讀み上げると云ふことにしてある。其の用意として二十日の終業式後教室内でこの手紙がどの生徒にもスラ／＼通讀し得られるやう、國語教授と同様に練習が始められる。詰まり全夏期を通じて私は斯くの通り働きませう。皆さん見てゐて下さいませといふ宣誓書と言つた風になるわけである。

以上で全く勤勞作業準備前記が終る。

2、夏期勤勞作業期間

右作業期間に於ては、格別何等異つた施設はない。たゞ鳴りをしづめ、九月の消息如何にと待つてゐるばかりである。

しかしたゞ、其の中に八月十日(即ち休暇四十日の中間日)を期して一葉の激勵の葉書を本人宛に出す。そしてこの葉書に對しては、何等か近狀を書いた

消息を本人から學校擔任に送るやうになつてゐる。今左に本年學校から出した葉書の本文を収録すれば、

(前略) 扱夏休の期間も早や其の半ばに達し候處休業前學校より課せられたる作業等はそれ〴〵進捗致し居り候哉其の節呉れ〴〵も申しおき候通り仕事働きと云ふものは其の數量如何と云ふことよりも寧ろ其の仕事の精神又は精粗巧拙に於て其の價値の多少の存するものなれば「御兩親への奉仕」「孝養の爲めの仕事」と云ふことを常に念頭におき遺漏なく立働かれたく候學校へお持ち歸りの回答の働きの各項中彼此緩嚴の差別はなけれども取りわけ「返辭の仕方」「腹立てぬこと」等大切の箇條にて朝の一番起きは最も肝要事なることに存候ゆめ〴〵御油斷なく努力せられんこと切望の至りに候

3、夏休み勤勞作業 後記

働きの後仕末のこと

夏休みは八月三十一日と共に過ぎ去つて、九月一日の新らしい幕は開かれ、生徒各自は夫れ々々の尊き家苞を懐にして校門を潜るのである。或る者は凱旋門を入るやうな胸のときめきを感じ、又或る者は、獄卒に追ひ込まれる様な悲しい心を抱いて。

(1)

新學期の始業式(九月一日)が終ると、教室に入り各自の思ひ〴〵の働きについて自己の感想を書き綴つて、上記の家庭よりの回答書面に添へ、擔任の手に提出する。そこで擔任は左の各葉を綴り合はせて教務主任に提出するのである。

- (一) 家庭よりの回答(これは上記の學校よりの通牒の空白欄に父若しくは母記すとして記録したもの)
- (二) 自己の感想(當日教室にて書きたるもの)

- (三) 八月十日の葉書に對する生徒より擔任宛の返辭
(四) 毎日記入の實踐表（毎日の仕事の成、不成等記したる表）

(2)

右の各葉が纏まつた處で、學級擔任は此れを中心資料としてクラス會を開く。このクラス會は九月中二週間乃至三週間にて全二十學級終了するのであるが（一日に二學級づゝ）、仕事の成績の最も優秀なるもの四五名が壇上に起つて、自分の働きについて所感を述べるのである。尤も之れについて生徒に注意すべき二三の事項を附記しておく。

其の一は、右の感想は各々自慢咄しをするのではないと云ふことである。學校から話せと云つて命ぜられ、夏期中あつた事實を語るものであつて、自分の手柄話を大袈裟に誇張して云つてはならぬ。餘儀なく話すと云ふ謙讓な態度であつて欲しい。次ぎには此の話を聴く聽衆であるが、聽者は聽者で又注意し、折

角の尊い力行話を茶化したり、輕蔑したりした氣持で聞いてはならぬ。中にも私の強い負け嫌ひな人は、あの人は偉らさうに話して居るけれども、自分はより以上だと、鼻で弾くやうにせゝら笑つてゐる人もないとも云へない。長所を他人に認めて自分の短所を反省して行くと云ふことが人間の美德である。その三は本校では菓子を用ひるクラス會は一般に許されてゐない。しかし此の度のクラス會だけは、固苦しくぎごちないものにならない様に、特に報告話のあつた後は茶菓が許されて、學藝會や、滑稽咄しや、唱歌舞踊なぞ行はれ。師弟とも和やかな氣分になり、笑ひどよめきの中に會を閉ぢるのである。

(3)

右の生徒力行談は、大抵九月一日に感想録として提出した通りのものが話されるのであるが、今左にその自己感想録中の一節を二三抄出する。

五學年生某女

「夜は祖母が身体が痛いと申しますので、毎日の様にマッサージをして上げました。或時などは夜中に首が動かさないと云つて苦しまれたので、殊ど寝ないでマッサージを仕て上げましたので大へん喜ばれました。」

四學年生某女

「學校で一番力を入れてをられる腹立は、家で去年よりずつと良くなつたと云はれますが、氣短かな私はともすると、フツと膨れようとして、いけないいけないと思ひ、外方の景色などを見て腹立を直しました。しかしまだく修養を積まねば「上」と書いていたぐことは出来ないと思ひ、來年こそはと今から思つてゐます。」

三學年生某女

「お客様がお出になると、玄關の取次ぎ、座布團、團扇などを運び、お茶を出して、玄關の下駄、靴を揃へ、塵を拂ひ靴を磨いておきましたので、お歸

りになるときは、いつも母にお禮を仰有つてゐられたさうです。それから又父さんや兄さんの靴を磨いて、感謝されたこともありました。」

二學年生某女【全文】

「來年こそ今度こそと頑張つてゐた働きの夏休みが來たのだ。朝の一番起き、私はいつも五時前後に起きた。父母が後で驚く様にするには今起しては何にもならないと思つて、忍び足で床をぬけ出る。顔も洗はず走つて大門を明け犬を二匹出す。これは町の人起きて、もう何々さんは起きて居なさると思はせるためだ。これから懸命に働く、どうしても女中が居ては、一つの仕事を爲し居るうちに次ぎの仕事を爲てしまつてあるので悔やしくて堪らない。十八才の若い女中で、私と張り合つて働いて居るのである。とう／＼決心して女中を出してしまつた。それで今迄のやうに學校から命じてある仕事許りは出来ない。掃除やら何やら、時には大切な洗濯を仕ない日さへある。」

しかし父は去年より學校の仕事は出来なくとも、家の爲めに確つかり働いてくれたと非常に喜んで下さつた。いつも父から手足が見苦しくなく大きくなつた、顔が赤くなつたと喜ばれた。

母も嬉しくて堪らないであらう。近所の人や出入の人にお話なさるので、到る所であの色のわるい弱いお嬢さんが、と驚いて見に来る人さへあつた。そして尙綱校にやれば好かつたと悔しがる人さへある。私は嬉しくてたまらず。弟の勉強の世話まで十分にした。

來年はますます働いて父母を喜ばせ、尙綱校を有名にし、自分の身体を強くしようと思つてゐる。

(附記—本年は平常健康に恵まれない方である)

一 學年生某女

「朝早く起きて先づ冷水摩擦をして御飯を焚くときの心持ち！ その時私の

胸に有るのは、おいしいご飯を炊いてお母さんを驚かしてやらうと云ふ嬉しい心で一杯です。お母さんが起きて入らつしやると、お早う御座いますと言つてから、ご飯の出来榮えを見せるときは、心は躍つてゐます。

洗濯を爲ますときは、私が洗つても少しも垢抜けしないと云ひながら、お母さんが仕上げ直しなさいます。その時は大變齒痒う御座います。それでも腹を立てるといけないと學校から教へられてゐますので、口迄出かゝつた腹立ちの聲をとめます。」

(4)

右の通りクラス會を終つてから、全体一つに纏め上げて、つぎの家庭への回答文が書き下されるのである。これが最後の成果であるから、印刷物が生徒の手に交附された處で、夏期前のやうに生徒全体の講讀練習が行はれ、家庭に持つて歸ると、其の日の夕食のとき家族一同の前で讀み上げさせるのである。此

の時感心に他人の記事でも恰も自分の手柄の如うに、誇らかに讀み上げられるものも有るであらうし、或は又針で刺される感で讀むのもあらう。休み中の千殊萬態の精勤努力の蹟が、再び自分々々色とりどりの良心の篩にかけられて讀み上げられることであらう。

(5)、家庭への報告

夏季休業中學校課題について成績お知らせ

(前略) 陳者本年夏休暇には例年の通り四十二日間を通じて家事に働き御両親其の他の方々へ奉仕する様切に要望致しおき候處皆々能く其の意を躰し呉れ生徒自身名づけて「働きの夏休み」「親孝行の夏休み」と稱し居る程にて第五學年より以下全校總動員にて勞働に浸り骨身惜まず精進致し候特に入學以來僅々三四ヶ月を経過せしに過ぎざる一學年生徒の奮闘振り等眞に特筆に價するものこれ有り候事寔に御同慶の至りに堪へず候其の後の行事として左の通り執り行

ひ候

一、九月一日登校の際夏休中働きたる自分の感想文を草せしめ實踐表(毎日仕事の數量等記入したる表)と共に御両親の回答に添へ提出せしむ

一、右書類は關係教師の目を通す

一、高學年より順次學級會を開き成績の良好なりと認めらるゝ數名の者に所感を述べしむ

右學級會に於て各々自分の働きたる事實を、造り飾りなく赤裸々に申し述ぶることに致し居り候されば千紫萬紅とりどりの中に特に我々を感動せしむるもの少なからず前述の通り一時は勞働精神に燃え候ものの若き人々の常として一週間も経てば暑さと倦怠の氣とに打たれ幾度か挫折せんとするは人情の常なるが此の弱き可憐の意志に鞭うち學校の精神を憶ひ起し或は八月十日の學級擔任よりの葉書に勵まされ美化運動の歌(美化運動の歌は洒掃を本としたるもの

にて終業式に合唱したるものゝを唱へつゝ、いしくも四十餘日を爲果せ凱歌を唱へ登校せしこと。若しくは學校のお蔭にて勞働の神聖なることを味ひ得たること。或は勞働が苦しみと云はんより寧ろ此の上もなき愉快なること、勞働の體驗によつて始めて眞に母の有難さを諒解したるなど、一年、二年の年少き人々の口より迸り出づる熾烈なる精神は轉た吾人をして感嘆措く能はざらしむるもの之有り候

今左に保護者の御回答の中より一、二拾ひ採り摘録致し候固より原文の儘に候家計簿の記入練習―「家族二人ですから家計簿は全部受け持たせました。始めお金を子供に與へまして私はその中からもらつて使ひました。中々節約をしますので、私が少し買つて参りますと叱られます。それでみんな子供任せに致しました。お蔭で此の夏休中は大變經濟で御座いました。毎日どんな小額でもつけ落しなくやつて居るのには感心しました。小さい手帳を作つて下げ

ておいて私にもこれにつける様にしてありましたのでつけ落しなく出来ました。」

五年―伯母より

腹立てぬこと―「流石に昨年比べて、これはよくなりました。弟にどんなにされましたも、じつとしてゐますので可哀相な位でした。誠にうれしく存じます。」

四年―父より

マッサードの實習―「この實行は殊に嬉しく存じます。時折り主人の不機嫌も之によりてよくなり笑顔を取り戻すことが出来て熱心にやつて呉れます。」

三年―母より

一番起き―「感心によく起きました。女中より早く食事の仕度にかゝりました。」

二年―母より

マッサードの實行―「男の子供は何一つ親孝行と思ふことは致しませんのにお母さん今日もマッサードをして上げませうと、夕食後いつも肩や手を揉ん

で貰つて女の子供は今から親孝行が出来るなあと有難く感じます。それも御校に入れたお蔭と思つて學校に對して感謝せずにはゐられません。」

二年——母より

作法實習——「夏休中で一番目立つて喜ばれたことが作法でした。今迄子供扱ひにして居りましたし、又自分も來客などに氣を付けて居りませんでしたがお休で家に歸りましたからは門口の處にお客さんがお見えになつてゐますのが見えますと、自分が直ぐ部屋に入り身なりを正し、お入りになる時分は座布團團扇などを用意して、お茶を上げたり、お煙草盆を進めたりして、其の致します動作がおとなしくて、にこ／＼して致しますので、女學校に入れた許りで、こんなに迄變つたかと家庭皆のものが驚いてをりました。」

一年——母より

其の他善行美事枚舉に遑あらず、特に一般手足を使うて働くと同時に益々深

く考へ研究する様になり働きの一層の精彩を加へ候こと一段の進歩と存じ候しかし以上に反對なる例も少なからず例へば上級生にして

「返事をせぬ事があります。この點一番困つた問題と思つてをります。」裁縫は少々手荒くてモスの單衣を引き裂いたり致しました。「家計簿記録練習中にお蔬菜は大變節約致しますが果物等は割合にどん／＼買ひたがりました。」

初年級の處で「少し叱言を申しますと直にツンとしてその日一日何を命じても服従致しません」便所掃除は去年は大變よく出來ましたが今年は二回丈けで少しも仕ようと思ふ意志がありませんでした。」

「少し氣にくわぬ事が有りますれば何でも物を投げる癖があります。」

右は保護者の御回答其のまゝのところにして斯様なのが随分少なからず。しかし此の如く善きもあり悪しきもあると云ふのが普通の状態なるべしと存候。尙ほ自己の手になる感想中次の如うなものこれ有り候尤も之れは初年級に候。

「腹立は成る可く立てない様にしましたが矢張り腹は立ちました。校長先生は腹が立つたら歌をうたへと云はれますが腹がたつて居るときは歌ふ氣持になれません。」

等々不成績な點も之れ有り候へ共未だ修養足らざる年少者には寧ろ有り勝ちのことにて決して悲觀するには及ばず、只高學年にして相當の年所を經、自分の缺點短所を自覺しながら、猶ほ執拗にも改悛の色見えざることあるは遺憾千萬に存候、然し此等は其の後學級擔任より篤と申聞かせ、又特に最終學年には、學校長より個人面談の際懇々と説諭致し申すべく候、最後に申し添へたきは今回御家庭よりよきにつけ悪しきにつけ有りの儘に御申出下され候こと、此の上もなき好都合にて感謝の言葉これなく候

尚ほ右努力者數多き中より前例により數名を嚴選し本學期發刊の雜誌「待春」に「力行録」をものし、秋の同誌を飾り申す可く、その節は是非とも御高覽下

され度候左に各學年學級別各種成績を數字に表はし御覽に供し候

一、朝の一番起きを續行せし者

第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	合計
甲 九 乙 七 丙 一 丁 三	計 五 甲 七 乙 一 丙 三 丁 七	計 三 甲 五 乙 三 丙 四 丁 三	計 九 甲 六 乙 六 丙 四 丁 五	計 二 甲 七 乙 一 丙 三 丁 一	計 四 甲 一 乙 三 丙 六

- 二、裁縫枚數 最多 五三(五丙) 次位 三五(二丁) 三位 二四(二甲)
- 級全体の平均 最多 八、六(五丙) 次位 六、(五甲) 三位 五、七(二乙)
- 三、洗濯枚數 最多 七五(一甲) 次位 七六(一乙) 三位 七二(二丙)
- 級全体の平均 最多 三〇四(二丙) 次位 二七二(二甲・乙) 三位 二六一(五甲)
- 四、張物反數 最多 四〇(一甲) 次位 二六(一丙) 三位 二七(四丁)
- 級全体の平均 最多 四、四(五丙) 次位 四、三(五丁) 三位 三、五(二甲・三丙)

右表につき御參考迄に左記申添へ候

一、第一、二學年等初年級の奮闘目覺ましきもの之れ有り候洗濯枚數と云ひ張物反數と云ひ眞に驚異的に候勿論張物などは一々大人の夫物にてはななくとも、兎に角其の意氣込みのすさまじさは記録にあたひするもの之れ有り候特に若き人の一番困難と感せらるる朝の一番起の如き、五年全体の四十五人に對して、第一學年の卅七人が其の次位に居るなど御注意下され度候二、尙ほ各學級全体としての平均數を昭和十一、十二、十三、三ヶ年に亘りて左の通り比較對照し御參考に供し候

【イ】 裁縫枚數 最近三年の平均枚數比較

年 度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年	
	甲	乙	丙	丁	甲	乙	丙	丁	甲	乙
十一年	二、八三、七五	三、七三、九三	三、五三、一三	三、五四、四四	四、一四、七〇	四、七九、五八	四、九〇、〇七	三、七〇、〇七	三、七〇、〇七	三、七〇、〇七
十二年	三、三三、八二	三、〇五、二四	四、〇四、五五	三、八三、四三	三、四三、五五	三、四三、〇四	四、〇四、九三	三、七〇、〇七	三、七〇、〇七	三、七〇、〇七

十三年	四、〇〇、三三	四、二四、四五	三、五七、七三	三、六五、〇四	三、五三、五三	三、〇〇、〇二	三、四〇、〇四	三、〇〇、〇六	三、〇〇、〇六	三、〇〇、〇六
-----	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------

【ロ】 洗濯枚數最近三年の平均枚數比較

年 度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年	
	甲	乙	丙	丁	甲	乙	丙	丁	甲	乙
十一年	一、八〇、二六	三、八三、〇六	二、八五、二八	二、五三、九六	二、七三、二六	二、六四、三二	二、六二、八二	二、二四、一〇	三、〇〇、一七	三、〇〇、一七
十二年	一、八三、〇〇	三、六二、八八	二、九四、二二	二、四三、三三	二、四〇、五二	二、四二、二二	二、二七、二六	二、二七、二六	二、九六、三三	二、九六、三三
十三年	二、四三、三七	三、七三、〇二	三、〇三、二〇	二、五三、三三	二、四〇、五二	二、四二、二二	二、二七、二六	二、二七、二六	一、七三、〇〇	一、七三、〇〇

【ハ】 張物反數最近三年の平均數比較

年 度	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年		第五學年	
	甲	乙	丙	丁	甲	乙	丙	丁	甲	乙
十一年	一、〇一、二二	三、〇〇、九一	二、〇〇、四二	一、四一、三二	一、九二、七四	一、八三、五三	一、四三、六四	一、四三、六四	三、〇〇、〇四	三、〇〇、〇四
十二年	一、六二、六二	四、四三、五三	二、二二、六二	一、三三、二二	一、二二、三三	一、〇〇、八二	一、五二、八二	一、〇〇、四二	六、〇〇、九三	六、〇〇、九三
十三年	三、五二、二二	三、六二、八一	三、〇一、三二	一、二二、五二	一、九三、〇三	二、〇二、二二	一、〇二、二二	一、〇二、二二	二、五三、〇三	二、五三、〇三

三、夏休前、家庭宛通信中、第一項の「二十日の夕食後本紙を読みしや否や」は、本校にては事前相當の注意を拂ひ居たりし點なるが、眞に四十二日間を通じて働かうと意氣込んで歸りし程の人は、此の項に深き關心を拂ふ可きは當然のことにして、詰り働きの誓詞とも見做す可きものにして、中には「うれしさうに讀みました」とか「三回程讀みました」とか明瞭に記しある向き多きに反して全く記録なきものあり、或は「讀まず」等あるは聊か拍子抜けの感之有り候

四、返辭振りは子女の家庭生活を解決する重要なる事項に候段々と良くなる傾あるは結構のこと存じ候若し此の上御兩親の意に充たぬことあらば、氣長く精々成功する迄御躑け下され度候

五、作法實習も亦好結果を得たる如し、當方に於て其都度申し聞かせ居る事ながら、この後に於ても夏休の時同様にして粗略にせぬ様御注意願ひ度候

六、腹を立てぬことは、全課題中の最難事と相見え候さればむく／＼と打ち腹立てたる際、齒を食ひしぱりて我慢する様目に見える如くに候。就いては種々の方法を案出して、この憤怒の情に打勝たんとあせる様あり、例へば自分の部屋に駆け込んで心を落ちつけたとか、すぐ鏡を見たとか、或は歌を歌ひ始めたとか、「一寸待て五分間」の標語を思ひ出して辛抱したとか、爪を甜りて乾くのを見つめて氣を外らしたとか、校歌を一回歌つたとか年若き人々の精神的努力のさま、同情萬斛に價するもの之れ有り候

七、冷水摩擦は此より好季節に入り候ことなれば、精々御獎勵願度し、夏休中の實行數は日常のものより稍々少なき感之れ有り候、御承知の通り冷水摩擦は、保健上恰適の方法にして中には冷水摩擦實行の爲めか近頃減切り丈夫になりたりと記されたる處散見致され候

實行條目は保護者の方々にて、よく御承知下され度候其の上にて御督勵の

程望ましく候

八、マツサーヂの實行にて偉勳を立てたる向き多きは結構のことと存候。これは只實効ありとか、なしとか、簡単に片づけず、其の當人の氣持ち心持ちを察しやり下され度候

九、前述の通り前年迄は主に仕事の數量にのみ着眼せし處、近年は深く其の質に注意し、研究的に行動すべしと申しおき候處全體としてよく其の意を體し、前述の通り手と頭と兩面の活動を忘れず、洗濯のもみ方石鹼の使ひ方等に非常に注意せる傾向あるは蔽ふ可らざる事實にして喜ばしきことと存じ候

十、右にて働きの夏休を了したると同時に此の働きの大部分を、今後に持續せしめられ度く學校の課業のあるときは兎も角、日曜日等事情の許す限り洗濯、便所掃除等爲さしめたく、此等は最も恰適の仕事と存候

十一、本年の特設にかゝる最も大切なる項は最初の朝の一番起きに候口にて云ひ筆にて書くは容易きことながら、四十餘日一日も缺かさず、一番起きを敢行すると云ふことは容易の業にあらず。されば夏休中如何なる成績を齎すべきかは、吾々當事者に於ても大なる關心を以て期待致し候處實行のもの千百名の中百六十名を數へ候こと、先づ先づ中等の結果と申すべく、特に二年、一年にて大なる自信と誇りと努力とを以て敢行したる傾向を取せらるゝは、洵に心強き限りに候

尙ほ以上申述候通り、當施設は皆様の御賛同に依り好結果を齎らしたりと存候此と同時に學校の課業始まりたる後は、又課業に一心にならしめ度く、特に目今勉強の好季節なれば、夜分等一時間半若しくは二時間位復習豫習等専念に努力せしめられたく希望の至りに存候

以上

(6)

愈々最後の終結として雑誌「待春」(待春は學校内の編輯雑誌で一學期一回づゝ一年間に三回發刊せられる)の巻尾に附録とし「力行録」と題して掲載し夏期中力行者の中、特に優良の者五六名を選んで表彰の意味で公にせられるのである。さればこの五六名の者が全校生徒一千餘名の中で掛け値のない努力の榮冠を獲得する譯である。

(7)

右の力行録の記事についても、クラス會の時のやうに二三の注意が與へられる。この注意書は、毎年の力行録記事の始めに掲げられるのであつて、左に其の全文を記載する。

生徒力行録について (昭和四年に草したるもの)

「昨年開催せし保護者會(昭和三年の保護者會)に於て、或る保護者の方より「生徒善行録」と云ふ様なものを刊行して表彰せられてはどうかとの希望があ

り、それが動機となつて、標記の如くに「力行録」と云ふ名で産れ出るようになりました。これは勿論生徒にも読んで貰ひたいのであるが、より以上に御家庭の皆さまに読んで頂きたいのであります。

何と云つても、この種の企ては、善行表彰と云ふ意味になるのであるから、決して惡からう譯はないのであります。しかし其の方法如何に由つて随分弊害の伴はないとも限らない。この點が私共の専念注意を怠らない所であります。で、左に擧げた數件を十分御諒解の上で読んで頂くと云ふことに致したいのであります。

1、表題の善行録とも云ふべき處を態と避けて「力行録」と名づけました。これは勿論善行でないとも云ふのではないが、名前を餘り大袈裟につけ過ぎると、表彰せられた常人には高慢心となり易く、表彰されない澤山の人の嫉視を買はぬとも限らないからであります。

2、この記録は、人格の表彰ではないと云ふことを極力お断り申しておきたい。力行録は、どこまでも事實の記録であつて、斯く々々の仕事を爲した。かくかくの働きを續けたと云ふ「有りしまゝの事實」の記述である。決して當人の氣質が美しいの、性格が立派だのと云ふ様な内面の人格に立ち入つて表彰するものではありません。

3、右の趣旨に由り、記録の文字についても注意を拂ひ、出来る丈け具體的事實を地味な筆で記す様にし、苟めにも麗言美句の空疎な文字の羅列にならぬ様に致しました。

右三個條の御注意を皆様に御願ひすると同時に、左記四個條の箴めを力行者及び御家庭に提言したい。

1、事實以上に大きな仕事を爲し遂げたと思ひ過ぎしをしない様にして頂きたい。

2、御自分の口から自慢らしく吹聴してはなりません。悪くすると善行が仇となり、人の嘲りと嫉みとを招來せぬとも限りません。自分は何も爲さない、表彰などは知らぬと云ふ風に無關心の態度で居る位にして欲しい。

3、力行録に載つた爲めに心を緩めてはならぬ。心身は有限でも仕事は無限であるから、更に自分の周圍に眼を向けて、この次ぎには何を爲ようかと四方を睨んで居る様。引き締め引きしめやつて行きたいのであります。

4、この力行録は、差しあたり職員、生徒の目についた丈けを蒐録したのに過ぎないのであつて、此の外一千餘名の生徒の中には、より以上の隠れた力行者が幾人在るか解らず、又有つて欲しいと思ひます。

(8)

左に昭和十三年度（第十一回力行録）に登載した實例の一つを摘録する。

第五學年生某女

なほ、最初に断つておく、力行録には擔任の言葉と、保護者の感想と本人の感想と三通りが掲げられる。

1、擔任の言葉

働きの模様は、後記本人の感想に示されてゐる通りで、どうしても本人が働かねばならぬ等といふ特殊の事情があつたわけではなく、至極平常な事情の下にありながら、學校の示す方針に副うて、まつしぐらに進み、何處までも眞面目に着實に、積極的に働き通したのであります。今年の働きに對する本人の方針は、有らゆる仕事に對して、先づ何より研究的にと云ふことだつた様です。そして色々工夫を重ねて、それぞれにいゝ方法を見出し、可成の成果を收めて居ります。就中特筆すべきことは、鋤を執つて農婦の如うに一仕事を爲し遂げたといふことであります。未だ鋤等持つた經驗さへない手に女中を相手に裏の荒地に出て開墾を始め、とう／＼立派な野菜畑をつくり

上げたといふことであります。

兎に角私はこの働き振りを見て、是は三年、四年、五年と年と共にデリデリと押し進めて此處まで来たもので、決して卒業したら直に消えて無くなるなどといふことのない、もつとしつかりした働きの根柢をつくり上げてゐることを知つて、頼もしく感じ、特にこゝに推賞する次第であります。」

2、本人の感想記録

私は平常家を離れて寄宿舎生活を致して居ります。それで何かといろ／＼家の者に心配許りかけて居りますので、この休みには親の許で、出来る限り働きたいとの望みを有つて歸省致しました。

起床後身仕度をして、朝食前に先づ便所のお掃除をやりました。臭氣を抜くことに努力すると共に、床板は必ず二回以上拭きました。二回目は、さう大して苦心せず大變垢抜けするものです。それから洗濯に取りかゝります

が、石鹼は「ペーリ」又は「チツソ」と云ふ自家に有りましたものを用ひて成る丈け経済的に致し、板にごし／＼揉み付るのは、生地を弱くする許りでなく、色が褪せたりしますので、これは絶対に避け、又夏物の垢れといふと、大抵汗でございますから、何回もす／＼様に致しました。お晝の用意によくお魚買ひに行きますが、昨年あたりまでは何がおいしいのか、どれ丈け買へばい／＼のか随分困りましたが、だん／＼馴れて割合に上手に買へる様になりました。

お晝後は裁縫、張物、洗濯物の取込み等致します。四時頃から夕食の用意に取りかゝりますが、この時は学校でお習ひしました割烹の實習を致します。でも田舎のことで材料がなかつたり致しますときは、例へばコロツケの肉を魚で間に合はせたり、いろ／＼工夫して経済的においしくやつて見ました。食事のお手傳には出来る限り力を注ぎ、成る丈け一人でやつて見まし

た。自分の誠心籠めて作った料理を、皆が喜んで食べてくれますのは、ほんとに嬉しいものであります。又今年は特別に寒暖計を以つていろ／＼の研究を課せられたので、出来る丈けやつて見ました。御飯も數回の研究の結果、私の経験では重い物を蓋の上に載せ壓力を用ひて炊いたものが一番おいしく又お湯は水道の水の温度の高い三時頃汲み入れ沸かしたのが、最も燃料の經濟であるといふことに歸着しました。

夕食後の片付一切が終りましたら、丁度好い時間を見計つて、祖母と母にマツサーヂを致します。年寄りはこのマツサーヂが餘程楽しみになると見え、下手な私が爲るのを喜んでくれました。夏は体がだるいものですから、手足に到る迄幾回も幾回も揉みます。二人を揉みますには時間がかゝり、段々手がだるくなつて來ますが、其の儘寝入らるゝことも度々で、其の喜ばれる顔を見るのが私にとつて一番楽しいことであり満足なことであります。其

の他特殊の作業としては裏庭の畑を拓いた位のものでありました。家中の者が暇々に裏の荒地を畑にしようとして、瓦や石、ガラスの破片等を運び去り、私も女中相手に毎日鍬を執つて働きました。凡てが馴れない仕事で、始め二三日は、肩が痛くてひり／＼する様でありましたが、到頭立派な畑となし、大根や菜を植ゑた時の喜び、毎朝一番に畑を見に往かないでは居られないのでありました。これは私にとつて、尊い々々経験でありました。私は鍬を持つ喜び、土に親む尊い氣持、それは／＼云ひ知れぬ歡びに胸は一杯でありました。「勞働は神聖なり」とはよく云ひますが、これは自分が實際経験しなければ解らぬものであると考へました。

そして此の経験こそ、この夏中の最も良き收穫であつたと悦んで居ります。

3、母の感想

(前略) 今度愚娘事。校友會雜誌に御表彰下さいますとか。誠に身に餘る光

榮にて、私と致しましても、こんな嬉しいことはございません。これも偏に先生方のあつき御指導の賜と有難く感謝致して居ります。

娘の、家庭での働き振りにつきましては、取りわけ何と申し上ぐる事も御座いせんが、唯いつも學校よりのみ教へに従ひ、實行課目をよく守り何事も苦にせず出来る様になりましたこと、いつも校長先生の御教訓「返事と共に起つ」の一事を守つて次第に身軽くなりしものとひそかに喜び居ります。

此頃何處へ往きましても、尙網校生徒の居る家庭は御便所が綺麗ですと言はれるのを聞きます時、私は校訓の有難さにいつも臉をあつく致します。この一言は全部の御家庭に亘りてのこと、想像致します。(後略)

4、働くこと云ふこと

(左記は昭和十五年七月右同様の目的にて口述したもの、併せて

茲に附記す

私どもの仕事と云ふこと、働くことと云ふことの尊いことは、日頃から能く話をしてゐる處であるが、今回の支那事變くらゐ、私共に此を實感させたことはいと思ひます。私どもは平常何も氣づかずに生活してゐる。節約だとか、勞働だとか云つて、何を爲ましても、皆自分一個人のことで、人様には關係がない様に考へがちであるが、夫れがさうではなくして、一舉一動悉くと言つて可い位に、國家と云ふ大きな團躰に直接に響いて行くことが判りました。御覽なさい三度々々食べるご飯の一杯づゝが、白米であるのと、麥飯であるのと、粟飯であるのと、それが一々國家的であるか、非國家的であるか判然と諒解せられたではありませんか。又三圓貯蓄すると、五圓貯蓄すると、無駄使ひをして赤字を出す皆自分の懐中のことで、何等他に關係を有たないやうであつて、決してさうでないことが判然致しました。吾々は國家の兒であつて何もかも國家

と結びついてゐることが今度こそ克明に判つたのであります。

さて私どもの働きから出来る仕事といふものは、何處から産れ出るものでありませう。丁度吾々が兩親から産れるやうに、仕事の一方の親は心であつて、一方の親は兩方の手であります。斯の心と手とが一如になつて其の間に仕事が生れて來るのであります。私は只今一如と申しましたが、一如と言ふ言葉は、心全体が手となり、手全体が心となり、心と手の双方が働いてゐるときは、もう心でもなく、手でもなく、心と手とが一つになつて些の隙間もない。こゝが一如の状態であつて、眞面目と云ひ、誠心と言ふ皆こゝの事であります。さう言ふと思ひ起しますが、皆さんのうちで五學年の方は、御承知のとほりこの五月に東京行きの長途旅行を致しました。さうして丁度好機會に投じたのであります。まして、宮城前の記念作業に参加させて頂きました。ところが此の作業に加はつた多數の人達のうちで、熊本の女學生の態度と働きは特に目について良く、

模範的だと言つて、總指揮官某少將から褒めて頂いたのであります。此のことは其の當時旅行團からも直接聞いてゐたのであります。なほ先達縣体育主事西園先生が東京からお歸りになつて、同様に此の感心咄をなさいました。そして某少將の感ぜられた四つのことを傳へられたのであります。その感心咄の四のうちの第一番に擧げられたのが、生徒の皆さんが黙々として一口も物を言はず、敬虔の態度を失はないで働かれたと言ふことであります。皆さん本當の眞面目な心になると他所事を喋舌る餘地はないのであります。心の全部が手となり、手の全部が心となるのであります。否此處は手でもなく心でもなく、手と心の合さつたものでもなく、強めて名前をつけよといふならば實に誠の一字になつて居るのであります。

皆さんの前の小路は、狭くとも小さくとも皆悉く東京に通じてをります。二重橋前の廣場に參朝致してをるのであります。いざ！ 起ち上りませう。そして

て斯の忠孝不二の尊い仕事に取りかゝりませう。

第五 節約

生徒に節約の觀念を植ゑつけることは、勤勞を課するほど容易ではなかつた。この節約の問題については相當長い間考へた。しかし其の都度思はしい案を得ないで空しく過ぎて行つた。そこで少々煩はしくはあるが、困難と煩雜は時日と共に消化し去るものと考へ直して、始めたのが次の通りである。實は最初は職員の中にも一種疑懼の念を有つた者もあり、生徒にも強制すると云ふことを避けて、各自の自由に任せて隨意とし、やる者はやるが、やらない者もあつて可いと云ふ位の程度にして取りかゝつたのであつたが、實際は賛成しないと云つて頑張るものはホンの少數であつた。しかし其の反對者の中には保護者總代の錚々たる人も居て、總代會の席上では随分異論の花の咲いたこともあつたのは事實であつた。

かくして始めたのが、昭和四年の四月からであつたから、爾來年を経て十年の餘になり、時日の經つにつれて段々と學校の常識となつて了ひ、今はもう誰一人異存のある者はなく、至極滑かに行はれてゐるが、それでゐて、事實はまだ、徹底しない憾が多い。と云ふのは保護者の中で事の煩はしさに億劫がつて、可い加減に考へてゐる人もあるのではないかと考へられるからである。

其の節約教育の方法は左の通りである。

一、節約品目は學用品に限り左の十種とする。

1、諸用紙（習字、書、作文用紙等々）

2、學校集金（生花、割烹、茶の湯等に要する料金及其他生徒全部一様に課せらるゝものを含みます。）

3、筆記帳

4、筆（ペンサキ、ペン軸等を含む）

- 5、墨（インキ等を含む）
- 6、鉛筆
- 7、裁縫用品（裁縫材料の布片を含みます）
- 8、便箋、封筒
- 9、切手、葉書
- 10、靴下（支那事變後靴下が非常に昂騰して來たので右の品目の中より特に此の項だけ取り除く）
- 二、以上十種の學用品購入費として一ヶ月金壹圓を毎月の初一日に保護者から貰ひ受ける。（この金の中には他人から貰つたと云ふやうな種類の異つた他の収入金を混入しない。）
- 三、毎日の支出は生徒自身の自由であつて、他からは一切干渉せぬ。
- 四、右の収入、支出は一々出納簿（反省日誌の後尾に添附してある）に記入

する。

- 五、毎月、月初め一週間を、學用品費出納検査週と唱へて、帳簿と現金とを保護者に提出し検査を受けしめる。
但し三學年以上は週の土曜日一回にとゞむ。
- 六、月末に残金を貯金袋に入れて學校に持つて來る。
- 七、教室で生徒隣席相互間で貯金袋を交換し、誤りなきや否やを調べる。
- 八、全校生徒の一ヶ月貯蓄現金を郵便局に預け入れ、通帳は各自保管する。
以上の通りであるが、本年（昭和十三年）七月二十日調査に由ると、全生徒千百四十名の一ヶ月貯金総額は五百三十六圓五十四錢となつてゐるから、一人平均一ヶ月四十七錢強の剩餘となり、一ヶ年の金額六千圓強の勘定である。
さて右十種の品目の中、最高の金額を占めてゐて常に問題となるのは靴下であつて、何とかこの靴下の節約に一生面を開きたいと多少の苦心と實驗とを重

ねたのであつたが、前に記した通り近頃靴下代が高くなつたので、右の品目中より取り除くことにした。

斯く繼續して實施してゐる中に、保護者の中に種々の異見が提出せられた。その一つは生徒の自由に任せておくと無駄使ひが始まりはせぬかと云ふのと、他は餘りにケチになり過ぎはせぬかとの心配である。無駄費ひの方は、良き教育の手がかりになり、ケチ黨の方は又別の機會に、社會的の救濟事業とか、時局等に關する國家的の支出等々、この中より支出せしめ、節約と貯金とは其の事以上即ちお金以上の意義を含んでゐることを承知せしめることになつてゐる。

第六 報 恩

報恩は云ふ迄もなく日本精神の中心であり、學校教育の基調である。されば學校の全運行はこゝに集中せられなければならぬのは勿論のことであつて、前掲夏休みの課題の中にも、この邊の呼吸は相當濃厚に含まつてゐると考へるが、こゝでは毎年夏休みに行ふ市内小學校に於ける學友會と、昭和十三年秋舉行した創立五十周年記念式の際。式場に於て朗讀した學校長式辭を掲載することとする。

1、市内小學校に於ける學友會

この學友會は、毎年夏休みに市内各小學校に於て開かれる會であつて、其の小學校の卒業生にして、只今では尙綱校の生徒であるものを召集し、兩校職員列席の下に、舊を語り新を告げ教訓談を行ふなど極簡単な會合である。今左に

この席上で私のいつも咄す一片の談話を記すこととする。

「皆さん。皆さんが今日久し振りに、この小學校即ち母校を訪れたと云ふことが、もう既に報本反始の一つであります。何故と云ふに、母校は即ち皆さんの産れて出た母胎即ち名前の通り母校であります。で、この母校に集つて來たと云ふことが、もう既に始めに反つて來たのであります。その上舊師にお會ひになると、これ又本に報い始めに反るのです。それは、母校の先生方は、皆さんの本であり、且つ始めていらつしやるからであります。勿論皆さんの身体は、御両親から戴いた身体であるけれども、皆さんの精神は、先生に由つて哺み育て、頂いたのであつて、若し先生方の御教へがなかつたら、皆さんは今日のやうに立派な心になり切らなかつたかも知れません。そこで皆さんが大きくなり、しかも健康さうに生き／＼と久々振りに先生方にお會ひになると、先生方は心からお喜びになるのです。その上、さき程の様に丸

で婦人一人前になつた様な働き振りのお咄を聞いて頂くと、どんなにお喜びになるか知れません。それは、先生のみ心は親の心でありますから、一寸でも一分でも伸びるといふことが、先生方の有難い御念願であられるからであります。

其の上に、久し振りに又先生方の御教訓を伺ふと云ふことが、又この上もないうれしいことで、是が又大きな報本反始であります。元來反始とは何んなことであらうか、始めに反れとありますが、始めとは先生のことであり、始めに反るとは、先生方のみ心に反ると云ふことであります。先生のお話を伺つて其の心持ちに副ふ、先生のお氣持に返つて行く、それが即ち反始であつてやがて又報本であります。

これは眞に畏れ多いことでありますけれども、天照大御神は、我々の大きい本であり且つ始めていらせられます。しかして其の大御心は、皆さんの能

く覚えてゐられる御神勅であります。そこで天祖の神勅即ち御思し召しを奉
躰し、一生懸命に實行することが、報本反始の最も大なるものであります。
勿論事の大小はあるが、先生の御教をお聞きして、其の趣旨に副ふことが、
報本反始で、全く道筋は同一であることがお判りにならうと思ふ。

されば今日の會合は、只お茶を喫んでお菓子を食べ、先生のお話を聞い
て歸つたと云ふやうな、淺薄な考を有つてはなりません。即ち尙綱五ヶ條の
中の「一つ報恩」の「本に報い始めに反れ」の實行であることを忘れてはな
りません。

2、本校滿五十周年記念式々辭

(祖先を憶ふ、—報本反始の式典)

時維れ昭和十三年十一月十八日長くも 今上陛下小校行幸記念の吉日をト
し、創立滿五十周年の記念式にかね、併せて校舎改築落成式を擧ぐ。今や戰雲

棚引く西方に、身命を捧げ國家に殉じつゝある將兵諸君に感謝しつゝ、次の言を
爲す。

抑々本校は、明治二十一年五月の創立にかゝり、本年五月を以て滿五十年の
齡を重ねるに到れり。思ひ返せば昭和三年五月六日滿四十周年を祝せしは、つ
い昨今のことのやうに思はるゝに、烏兎勿々早や十ヶ年を経過して、再び茲に
朝野貴紳來賓各位、保護者諸君及卒業生諸氏の御臨席を辱うし、斯くも盛大な
る式典を擧ぐるを得しこと、一面感謝と喜悅とを感ずると同時に、他面局に當
れる吾々同人に取りては、徒らに歳月を食み、無爲にして各位に面すること轉
た慙愧の至りに堪へず。さは言へ、教育のことは、その多くは内面のことに屬
す。一面は教師自身の反省にして、他の半面はこの反省に由る感謝と自奮とな
るべし。若し然りとせば齡五十を數ふる本校今回の式典に於て、過去の歴史を
追懷し、其の善きにつけ惡しきにつけ、これを検討し批判し、以て悠久の將來

を策し、私立學校の特色を認識し、基礎づけること。又徒爾にあらざるべきを信す。

さて私立學校の特色とは何ぞや。私立學校はたゞ普通の學校にして、別に其の特異とすべきものなきか。若し然りとせば吾等は其の色彩の半ばを奪はれて、たゞ弱小の生命に喘ぐに過ぎず。

人或は謂ふ。教師の任期の長きは其の特色とすべき一なるべし。任期長ければ、自然校風其の間に生ぜんと、この説或は然るべし。現に本校に於いて十年以上の勤続職員二十三名にして、二十ヶ年以上十名、二十五ヶ年以上にして五名の多きに達す。然れどもこれ必ずしも私立學校の特質にはあらず。これ等は他の學校にても所期せらるべきことにして、吾等私立の常素にてはある可けれども、その要素と言ふは未だしなるべし。

余は、茲に率直に謂はんと欲す。私立學校にして他と區別すべき顯著なる點

は、其の祖先を有する處にあるべし。何を以て爾か言ふ。

曰く、我等が茲に祖先と言ふは、たゞ初代校長。若しくは歴代職員と言ふが如き簡單なる意味合ひのものにあらず。祖先の眞の意義は、物と心、即ち物心兩面を創造し産出する所にあり。身体を産み、乳を與へ、物質の所與を満たすと同時に、教へ、導き、訓戒し、精神的内容を與ふることに依り親たり得べし。産み且つ育つるも、教へざれば親たり難く、教ふるも育てざれば親とは言ひ難し。されば眞の親と言ふべきは吾人に吾人の全体を與へし祖先なるべく、親心とは物と心、身体と精神との兩面を満足せしむる所にあるべし。

申すも畏きことながら、吾人古事記、日本書紀を繙きて、諾冉二尊が「吾れ既に大八洲國及山川草木を生めり」と宣はせられしと言ふ意義の如何に重大にして且つ深遠なるかを悟り得べし。何となれば吾人は、天祖の神勅、御鏡及齋庭の稻穗を下し賜ひしと相俟ちて、諾冉二尊が吾が國土を産み出されたりと

云ふ。這は唯古來より傳はりたる神話に過ぎずと、一言に言ひ捨つ可きにあらず。吾等の心の惹かるゝは、斯くの如き神話が、幾千年の間何等疑問を生まずして、其の儘に語り傳へられし所以のもの、畢竟するに、我等の大祖先が物質と精神とを與へ給へる大和民族の願ひと望みと信仰との結びつきたる必然の結果と見らる可きにあらずや。

勿論事に大小あり。説くに尊卑の差別はあれども、祖先の眞の意味はまことに斯かる所に存すべし。この點に於て吾々私立學校は皆祖先を有てり。何となれば學校の精神と物資の全部は、みな我等の學校創始者即ち祖先の所産なる可ければなり。然り吾等は祖先を有てり。吾等は茲に第一の幸福感を有す。惟ふに我が國の如き家族制度の邦家に於ては學校が祖先を有せりや否やは、決して輕々に看過すべき一些事にあらず。

次に、吾が尙綱校は、吾等の祖先の遺しおきたる尊き一籌の教條を有す。尊

き教條とは何ぞや。先刻朗讀したる創立當時の趣意書これなり。元來この趣意書は、佐々克堂先生の筆に成れりと云ひ、或は又木村弦雄先生の書き下されしものなりとも言ふ。其のいづ方手に成れるものなりや明かならず。或は言ふ、明治二十一年五月二十日の開校式當日に、内藤儀十郎先生の朗讀せられたりと云ふ古き記録の歴然たるを見れば、校主兼校長の重責にありたる内藤先生の、該趣意書の作製に無關係なるを得ざるは當然のことなるべしと。さればその誰人の手に成りたるや審ならずと雖も、兎に角以上二三氏首腦の方々の鳩首凝議の結果になりたるものなることは、争ふ可からざる事實なるべし。

抑々明治二十一年の頃は、彼の歐米の惡自由、惡平等の個人主義的思潮の澎湃として寄せ來り、しかも朝野狂喜して之を迎へ、敢て遮り止むるものなく、鹿鳴館のしだらなき亂舞の動搖めき、晝となく夜となく打ち續き、心ある人をして眉を顰めしめし、謂はゆる外風汪溢頹廢氣分の浸透せし時期なり。

この事實と照らし合せて、是の趣意書なるものを通讀するに、吾人の眼臉を射る文字二つあり。その一つは知徳並進にして、他は良妻賢母といふことなり。兩者とも五十年後の今日に於ては、まことに常識的の平凡なる文字にして、誰人も格別異しむ所なかる可しと雖も、遡つて明治二十一年創立當初の社會情勢を觀見すれば、實に思ひ半ばに過ぐるものあるを見るべし。

斯くて、明治二十二年の憲法發布前一年、教育勅語御下賜に先だつこと二年にして、斯くの如き日本女性の魂ともいふべき椽大の文字を見ること、全く吾人の驚異に値す。さればこの趣意書は、憲法草案に關係ある井上毅先生、教育勅語に深き因みある元田東野先生とも一脈相通する肥後魂の所有者に由りて筆にせられたるものにあらざる乎。

以上くたくしく述べ來りたるが、思へば吾人は數多き幸福裡に呼吸し居れり。行幸の恩命を拜受したるはいふ迄もなく其の大なるものなり。昭憲皇太

後の御歌御下賜相成たる又比類なき光榮なり。而して上述の通り、吾等祖先の儼存を得、長の教條を胸に懷けるは、又その幸福の卑小なるものにあらず。吾等同人は、此等最高なる幸福の渦中に涵煦す。しかして此等稀有の歴史を背後に負うて、現在及將來に生き得るや否や、こは一にかゝつて吾等の覺悟と運營に由ると言はざる可からず。

まことに、上の如く創立當初の趣意書なるものは、吾等後人に與へられたる尊き眞實の指導精神なり。それ、誠は天之道なりと謂へり。しかして之を誠にするは人の道なり。誠は眞實の言葉即ち眞言にして、又眞實の事即ち眞事なり。眞實の言葉を眞實の仕事と爲す所に誠は存す。されば斯かる尊き祖先の教を枕にして甘睡を貪るは、人の人たる誠の道に背くものと言ふべし。

思へば吾人の職責や重且つ大なり。濫りに歲月を徒消して、光明に充てる祖先の言葉に辜負すること多きを思ひ、轉た恐懼慙愧の至りに堪へず。茲に創立

五十周年の關頭に立ちて、遙かに創立滿一百年の波頭を翹望しつゝ、校舎一部の艤装を改め、更に新しき水路に出でん。

終に臨み生徒諸子に一言す。以上の創立當時の趣意書なるものは、本校祖先の宣言にして、本校の在らん限り其の魂として永遠に生きて存するものなり。過去の五十年に於て然りし如く、今後幾百年を経とも渝ることあらざるべし。先刻朗讀せられたる尙綱五ヶ條の中

一、報恩。君の恩、親の恩、師の恩、社會の恩、神佛の恩、諸恩の中に吾等は芽生む。本に報い始めに反れ。

とあり。本と謂ひ、始と謂ふは祖先のことなり。されば吾等の機會ある毎に、本と始と古とに復り、その純にして曇りなき鏡の裡に、汚れ勞れたる自己を照し出し、反省の誠を盡すことこそ、報恩の要諦にして、報本反始とは即ち是れなり。されば本日のはの式典は、祖先尊崇の意義を含み、報本反始の集ひなる

ことを忘る可からず。聊か蕪辭を述べて式辭と爲す。

3、永年在職祝賀會に於ける御挨拶 昭和十五年十一月二十五日

本夕は、私の永年勤績の廉を以つて、斯くも多數の方々がお集り下さいまして、私共夫妻、御鄭重なる御寵招を頂きましたことは、何と御禮を申述べて好いやら、私の胸裡に渦捲く喜びと感謝とは、到底口にも筆にも言ひ現はすことは出来ないであります。只今は又發起人の方より過分の御詞を頂きました、唯々慚愧に堪へない次第で御座います。思へば只永らく本縣に御厄介になつて居たと云ふ丈けで、何等取り立てゝ爲す事もなく、謂はゆる無爲無策で三十五年の永い一生を徒食致しましたことをお恥しうも存じてゐる次第であります。

私の生國は鳥取縣で御座います。鳥取市を去る西五里許りの處に奥澤見といふ小さな部落がありまして、貧寒な一小村でありますが、私は其の草深い土の間から生れたのであります。しかるに今日、この高い段上をけがしますと、第

一番に三十八年前に亡くなりました父のこと、十七年前に逝きました母、一昨年歿しました兄、本年五月亡くなりました姉の傍が感激の涙にうるむ臉のひまに、まざ／＼と見える様な氣持が致します。こゝに妻も御寵招を頂き御高情を忝けなく致して居るのでありますが、今は同様世に亡き妻の兩親諸共總ての私共の尊族一同こゝに叩頭合掌致しまして、皆様に御挨拶申し述べたい心に打たれます。特に私の父は、其の亡くなります時に、丁度私が學校卒業の間際で、或る事情の爲に會ひたい／＼と云ひつゞけて、しかも其の志を遂げ得ないで、恨みをのみ幽明處を異にしたのでありました。私は終世この哀しみを忘れ得ないのでありますが、とりわけ今晚はその當時を思ひ出しまして胸がうづく様な心持で御座います。されば今夕は多分父が第一番に地下に喜んで呉れるであらうと存するのであります。

思ひ返しますれば、私は明治三十年丁度今より四十四年の昔になります。鳥

取の師範學校を卒業したのでありますが、其の頃より餘り身体が強くなりません。其の爲め四年の師範を五年かゝつた様なわけで、此の若い時分からの腸胃の悩みは、六十五歳の今日に到る迄、縦に貫いた一生涯の重荷でありまして、身体の痛みでもありませんが、延いては少なからず心の痛手でもありました。師範を卒業しますと、鳥取市の小學校に奉職し、此に二年許り御厄介になりました。それから高等師範に入りまして卒業しましたのが明治三十五年であつて直ぐ四月から岐阜の師範に参りました。回顧しますと、生徒としても、教師としても餘り香しからず、心に慍怩たるものが御座います。岐阜に三年居りました、其の當時熊本縣立高等女學校只今の第一高女に轉じて参つたのであります。第一高女に御厄介になること十七ヶ年でありましたが、其の間多少でも成功したと思ふ様なことは一つだも思ひ出せません。しかし失敗しましたことは、只今でもまざ／＼と目の前に浮んで参る様な氣が致します。たゞ第一代

會田校長、第二代一谷校長、第三代吉田校長に歴仕し、同僚先生方の御高情に依りまして、僅かに大なる瑕瑾なきを得たまででありました。夫れにも拘らず、先生方の御好意、卒業生や生徒の方々の御同情は、二十年後の今日に到りましても、忘れることの出来ないものがあります。其の當時皆さん方の厚きお心持が、腹の底まで徹るやうに感ぜられまして、

梅一輪我がすむ部屋の暖かき。

と詠じつゝ、盡きぬ名残の校門にお暇申し上げた次第で御座いました。で、尙綱校に参りましたのが、大正十一年四月でありまして、二十四ヶ年間尙綱校産みの親の内藤儀十郎先生、つゞいて十年御勤績の福島綱雄先生のお後を承け継いだのでありました。

然るに丁度其の参りました夏のこと、まだ三四ヶ月しか経たないときでありました。ふとしたことから、故池邊義象先生と御遇ひ致しまして、尙綱校にと

りては容易ならぬ一大事實に逢着致しました。先生は、皇室御記録御編修の砌皇室の御日記御記録に、昭憲皇太后より御歌を熊本の某女學校に賜はる。税所敦子謹んで誌るす。として有難い御歌が記録せられてゐたことをお見出しに相成つたといふお話であります。其の當時には、熊本の某女學校と言へば、尙綱校のことでありまして、まだ濟々曇附屬女學校として存在してゐた時であります。夫れで特別の名前は附いてゐなかつたのであります。此の思ひも寄らぬお話を承りまして、種々取調べの結果、時の 皇后陛下、即ち只今の 皇太后陛下に謹んでお願ひ申し上げ、再御下賜の有難い御恩命に浴したのであります。

超えて丁度十年を経過致しまして、昭和六年十一月十八日の佳き日。今上陛下御行幸の世にも有難い御沙汰を拜しまして、唯々優渥なる 聖恩の有難さに感泣致したのであります。と申しますのも、みな皆様の御引立てに由ること

でありまして、特に陰になり、陽になり御援助を賜はりました安達先生御夫妻の方に朝夕感謝致して居る次第であります。當時私は、

天津日は小草が上に照りはえぬ吾は此の園に老いんとぞ思ふ

と柄にもない一首を詠じました。一体私は至つて無趣味殺風景の木強漢でありまして、和歌と言ふやうな雅びた業には縁遠いのであります。併しこの時の感懐は、平常詠みもせぬ歌でも詠まなければ、到底おさへ切れない感情を如何ともすることは出来ないものであります。恐らく此の一首が、私生涯の作歌の最初であり、又最後であるだらうと思ふのであります。

つゞきまして、昭和九年四月二十日、新宿御苑觀櫻の御宴に御召しを拜受致しまして、參列の御恩命を辱う致し、再び天威に咫尺し奉ることの光榮に浴したのであります。

斯う勿躰ない有難いことが度々重つて參りますと、彼の親鸞上人が「偏に親

鸞一人が爲めなりげり」と歎異鈔に出てをりますが、泌々と「我身一人の爲めなりげり」と言ひたくなる感じに打たれます。

私は以上の如うな身に餘る澤山な光榮を身一人に頂いたのでありますが、これを風呂敷包みにでもして、一括りに致しまして、何處の世界へでも其の儘持つて往くことの御許しを願ひたいのであります。サア行手は地獄でありますか、極樂でありますか、親鸞上人でさへ、「地獄は一定住所ぞかし」と仰せられた位でありますから、私などは地獄の底の下積位が精々の處であります。しかし斯う云ふ御祝ひの目出度い席上で、地獄往きのお咄でもありますまいから、お許しを願ひまして、この席のお咄だけは、極樂の阿彌陀さんの世界に往かして頂いたと致します。しかし此の極樂とても、何かそれは縁起でもないとお叱りを受けるかも知れませぬが、近頃は何もかも新体制でゆくと、大抵な處は通ることになつてをりますから、新体制下の祝賀會だとおぼし召し下さいま

して、本夕丈け言ひたいことを言はせて頂きたいのであります。

そこで私は、阿彌陀様のみ前に平伏致し、例の光榮に満ちた數々の包み物を披いたと致します。

「み佛様、私は何等爲すことなくして、斯くも多くのみ恵みを頂きますのは、全く佛罰に値ひする様に感ぜられます。これは人違ひではありませんまいか。」すると佛様は苦笑ひなさいまして

「さう思ふならそれでよろしい。しかし人違ひと言ふことは、人間の世のこと。で此の世ではそんなことはないわい」

「ハイ、恐れ入りました。み言葉を返す道理にも當りますが、全く私には有難過ぎるので御座います」

「これ／＼何を言ふか。有難過ぎると言ふのは、まだ／＼自分といふものを立て過ぎて居るもの、考へ方であるぞ。有難過ぎると思つてはならぬ。皆自

分の外から賜はつた恩であるぞ。そちは恩の國日本に生まれ、恩を産む婦人を教育する爲めに、一生を委ねたではないか。思ひ上りをして迂濶なことを考へてはならぬぞ。」

み佛様の御言葉は優しいが、穢れ多き身には針を刺されるやうな感に打たれます。成程有難過ぎると考へるさへ、もう自分の仕事に對する報酬の多寡を取り引きの考へてをる。主觀の自力に傾き過ぎて居る。これは斯の阿彌陀さまの世界に於ては有つてはならぬことだ。斯の世では凡てのものを客觀的に他力に御恩だと考へなければならぬのだ。御恩だと考へるところに過ぎると言ふことはない筈だ。成程み言葉の通り、有難過ぎると考へる丈けでも、もう自分の思ひ上りの増上慢といふものだ。と合點が參りますと、冷汗脊筋を走るの感じが致します。

此のみ佛のお前に披きました有難い光榮に充てる頂き物の數々の風呂敷の中

に、今晚のこの皆様からの御厚情が、恰も金の延棒の如くに光つてをります。

思ひ返しますれば私は、女子教育に携るやうになりましたから前後三十九年になります。初めの三年や五年は、夢の如くに過ぎましたが、ものゝ十年も経ちますと、これは私は終生女子教育に終始するやうに運命づけられて居ると覺悟致します。さうしますと、何とか御婦人のお爲めにと言ふよりも、寧ろ大きく日本婦人の爲めに申し上げるやうなことはないものか知らん。一寸の虫にも五分の魂と言ふことがある。自分にも小さな魂がある以上、何か問題はないものかと相當長い間考へました。併し空つポの頭で實の入つたことの考へ出さる可き筈がない。空砲を幾度撃ちましても、實弾は出て來ないのであります。それで今夕は私の胸に巢喰うてをります拙いことを失禮ではありますが、本日の御挨拶にかへて少し許り申し上げて見たいと思ひます。

以下御咄申し上げることは、私の信念と言ふよりは、寧ろ妄信でありませ

う。只お願ひ致しますことは、年寄つた女子教育者が何を申し上げますか、一片の老の繰り言を少しの時間頂きまして、一生涯に又と來ない此の榮えある席上に於て自由に述べさせて頂きたいのであります。と申しましても、珍しいことや氣のきいたことを申し上げるではありません。たゞ一場の駄言として御一笑に附してお聴き流しを願ひます。

日本は神國なりとは神皇正統記に書き出されました最初の言葉であります。又日蓮上人は「大乘の國日本なるぞ」と叫んでお出になります。これに因みまして私は、「恩の國日本」と言はせて頂きたいのであります。多分はこの三つの言葉即ち神國といふのと、大乘の國といふのと、恩の國と言ふのとは、互ひ々に重なり合つてゐるのではないかと考へるのであります。何んと申しましても日本は恩の國で、男さんも女さんも、老いも若きも悉く恩の人であります。所謂恩の一色でもつて塗られてゐると考へたいのであります。

一体私は妙なことを言ひますが、恩の色と言ふことを申して見たいのであります。恩と色とは途方もないおかど違ひでありますけれども、どうした因縁からか、私は恩の赤色と申して見たいのであります。どうして赤色かとお訊ねになりまして、お答へは出来ないであります。たゞ赤色のやうな氣持がすると言ふだけであつて、何等の因果關係や理由關係はないのであります。多分は赤き心とか、丹心とか言ふやうなことから、惹いて日の丸の旗など聯想致しましてさう考へるのではないかと思ひます。が、勿論ソツイエート露西亞の赤色とは違ふのでありまして、恐らく對蹠的なものと考へます。露西亞の赤は、物質の最左翼に位する赤であり、日本の斯の恩の赤は、精神の最右翼即ち最も高次至上の精神に屬するものではないかと思ひます。さう申しますと思ひ當りますのは、日本で描かれた地圖は、全く凡てが日本帝國の版圖丈けは、血の滴るやうな赤色に染つてをります。此の色を見て私は、いつも「恩の國日本！」と

いふ心の叫びを禁じ得ないのであります。而うして茲に私は、此の「赤色の恩の芽」を産み出したものは、日本の御婦人方だと申したのであります。

扱學者の教へる所に由りますと、恩とは「メグミ」と訓みまして、「メグム」即ち「芽産む」ださうであります。御存じの様に、日本は産む國であります。神代から産む國で産れ出てをります。申すも畏きことながら、伊弉諾、伊弉冉二柱の大御神はお國を産まれました。山川草木皆産まれ、月讀尊、天照大御神、素盞鳴尊を御産みになりました。日本建國の抑々の出發點は産むことから始まつてをります。

一体結ぶといふことが産むといふことださうであります。高御産巢日の神、神御産巢日の神と申されますと、産むと書いてあります。「巖となりて苔のむすまで」は、苔を産むのであつて、露を結ぶと申しますが、露が産まれるといふことであり、結婚は結ぶ婚と書いて、婚が産まれるのであります。男の兒を

ムスコ、女の子をムスメ、何れもムスで、産むであります。そこで産まれる男の子がムスコで男であり、産まれる女がムスメであります。これで三千年この方通つてをります。そして考へますのに、何もことごとく産む兒、産む女と断らないでも、産まれない子供といふものは、何處にもあるものではない。それを殊更にムスコ、ムスメと言ふのは、多分俺が産んだ兒、俺が産んだ女の子といふ意味であつて、私は産む國日本と思ひ合せまして、此の言葉を聞きますときに、日本男兒こゝにあり、日本婦人茲にありと言ふやうな響きを感じるのであります。兎にも角にも産むといふことは、結ぶといふことゝ同義でありまして、子を産むのは夫婦を結びつけ、親子を結びつけ、家を結び、國を結ぶ。詰り國も家も個人も一体と爲り結合するのであります。而して其の結合の精神的内容はと訊ねましたら、母たる人の子供に對する愛であり、恩であると申したのであります。そこで私は前言を繰り返しまして、

日本婦人は、子を産み、愛を産み、恩を産む。

と申したのであります。

大層お咄が理屈めいて參りました。御退屈で居られませうが、今少し申させて頂きます。次ぎに産むといふことは凡てを與へるといふことであります。子を産むと申しますと、子供の身体、精神は勿論のこと、寒ければ衣服を與へ、ひもじければお乳を與へ、何うして與へようかといふことが母親の悩みであります。そして其の子供から髪の毛一本取らうとは致しません。

これに對しまして、性愛と申しますか、戀愛と申しますか、男女の愛、乃至夫婦愛に至る迄悉く取る愛であります。勿論與へも致しませうが、却つて取らんが爲めに與へるのだと言つても差支ない位であります。美しいのが好いといへば、美しさを取るのです。人柄の良いのが好いといへば、人柄を取るのです。又健康なのが好いといへば、健康を取るのです。嫁を取る。聳を取る。取

りに取る。娶るといふ字は取り冠りに女とあります。何もかも腹一杯取る。

「残りなく愛は奪ふ」と申します愛は、男女の性愛であります。

之に對して母親は少しも取りません。美しい子供は可愛いに相違ないが、汚ない、よごれた、涙垂しが又可愛い。健康なものも可愛からうが、病氣許りして居る子供が猶可愛いのです。「惜しみなく愛は與ふ」と申しますときの愛は、この母性愛であります。

扱、只今私は、母性愛は凡てを與へると申しました。時には苦い教訓を與へます。戒飭乃至懲罰をも與へて顧みないことさへあります。斯様なときには、子供の恣意とか自由とかを奪つて恰も奪ひ取るが如き觀を呈することさへ少なくありません。併しながら斯ういふ時すら、猶且つ與へるのであります。のみならず斯様なときが寧ろ高次の所與であると考へられます。斯の高き所與即ち與ふることの頂点から母親のお乳のやうに、精純なる恩の滴りが滾れ墜つるの

であります。そこで私は再びこゝに

日本婦人は、子を産み、愛を産み、恩を産む

と斯う申したのであります。どうぞ恩の赤色が行く末長く御婦人方の與へて與へて與へ盡すことに由つて色が薄くならぬ様に、益々その濃さを加へる様にと心から祈つてゐるのであります。

支那事變は、恩の戦ひであると考へられます。寔に十數萬の生靈と幾百億萬圓の物資を盡して、猶ほ且つ土地不割讓、戦費不賠償といふのが、畏き邊りの大御心であり、又近衛さんの聲明であります。與へて取らないのであります。それで支那事變は全く恩の戦争であつて、三千年この方古い恩の舊家が、大きな大庇を、東洋から東亞へ、つゞいて世界へと一杯に擴げる大庇の大修繕の工事であります。八紘一字と申しますれば、世界を一軒の家と爲すことださうであります。此の家は即ち恩の家だと考へなければならぬのであります。若し此

の際私共に少なからぬ苦痛がありましたら、恩の國日本が偉大な恩を産み出す世界的の大陳痛だと承知したのであります。

長々と詰らぬことを申し上げました。私は好んで佛典をチヨイ／＼覗きま
す。ホンのチヨイ／＼の覗き見位の處であります。其の思想の段々と發展し
て参りました火のやうな最高潮に達しますと、「天鼓を撃ち」とか「天華を雨ら
せ」とか書いてあります。天華とは天の花であります。これはいろ／＼の解
釋もありまして、或は私の言ふのは間違つて居るかも知れませぬが、私には天
から御恩が降つて来るやうに感ぜられるのであります。本日は本當に有難い皆
様からの勿躰ない天華を浴び、天華に浸り、天華に濡れ、身も心も一つになつ
て、何とも形容し難い悦びと感謝と感激とに震へて居る次第であります。有難
過ぎると申しましても、御佛様に叱られませうから、本夕はたゞ此れ以上何も
言はないで、黙つて皆様の御恩を満喫致しまして、大に頂く覺悟で御座いま

す。

以上御聞き苦しい老いの繰り言を長々と申し述べまして恐縮に存じます。こ
れを以つて御挨拶と御禮に代へたいと存じます。(以上)

後 篇

第一、日本婦人の貞操線

1

これはさる女學校で有つた咄である。學校の上級生の一人で、もう聽て三月卒業しようと云ふ間際に、冬休みに行かれた不始末事件が明るみに持ち出された。なにしろ相手は〇〇〇〇であつて、こちらは卒業が目睫の間に迫つてゐると云ふのであるから、學校としては容易ならぬ事件である。

そこでこの事が明白になつて、女性當人も自白したと云ふわけで残念ではあつたが、遂に退學處分になつた。可哀想に卒業したら斯うも仕ようあゝも仕よう夢を追うて甘酔を貪つてゐたに相違ない。しかし〇〇では結婚問題が相當にやかましいから、相手が〇〇であつて見ると容易く結婚させよう譯がない。

そこで結局學校は放逐される、的は外れるで、彼の女は哀れにもいつ迄も暗い處で、じめじめ泣いてゐなければならなくなつたのであつた。

2

之れに反して男性の側は何うであつたらう。彼は至つて平氣である。女の卒業が駄目にならうが、結婚談が破れようが、もう彼の關知したことではない。彼はやがて〇〇〇〇に入つた。其の當時は〇〇〇はまだまだ珍しい時分で、田舎では〇〇〇を見ることさへも容易でなかつた。彼がこの學校を卒業したとき、丁度秋の〇〇〇〇〇〇が行はれた。〇〇は數萬の〇〇や觀衆の頭上を鳥の如うに〇〇を張つて飛び廻つた。そして觀衆の歡呼の聲を浴びたのである。知らない人は勿論何も知らぬが、以前の事をくはしく知つてゐた私共は、世にも苦々しいことに感じたのである。

3

何故に私共は斯くも不公平な片手落ちな裁きを目前に見せつけられねばならぬのであらう。勿論男女間の情事であるから、どちらが良いとか悪いとか云ふべき筋合ひでもなく、言はゞ双方共に悪いのである。しかしながら女性の方は何と云つても十六か七の、世間のことは何も知らない可憐の少女に過ぎないのである。と同時に一方の〇〇はさう素朴な世間知らずではない。なにしろ堂々たる〇〇の〇〇である。身分もあり、地位もあり、世故にも通じ、特に名譽第一の〇〇〇〇である。しかして斯く年端も行かぬ一處女を手玉に取つて、猫が鼠を遊ぶ様に扱つておいて、事件が破滅になると知らぬ顔して居て好いものか、私共の正義の觀念は斯う云ふ事實を聞睹するとき、怪しう胸裡の動搖を禁じ得ないのである。世人口を開けば正義とか人道とか立派なことを言ふ。しかし世間に有り勝ちなかう言ふ事例に對しては誰人も口を噤んで面を向けようとしないのが常である。私共女子教育に携るものは、性の問題について平かなら

ざるものが、いつも斯様な不公平極まる點に存するのである。

4

しかしながら更に翻つて考へると、性問題の複雑性と重要性が矢張りこゝにあるのであつて、簡単に不公平とか不合理とか云ふ抽象的な言葉で片附けて了ふことの出来ないものが有るのではなからうか。元來社會と云ふものは、不公平に見えてゐる案外公平であり、ぬるま湯の如くに緩慢であつて存外熱湯のやうな峻烈味を内包してゐる場合が屢々ある。

さればこの問題の如きも其の眞實性は、寧ろ斯様な表皮の感覺層を越えて、深い内面に潜んでゐるのではなからうか。

5

一体責任は申す迄もなく人格から湧き出づる。凡ての責任感は人格感であるといつてよい。犬や猫には刑罰はない。刑罰や責任は人間のみの負ふ人間らし

い特権である。この特権の抛棄は責任の抛棄であつて、同時に人間性そのもの
の抛棄である。されば責任の大きさと深さはその人の人格や、地位や、名譽
や、職業の社會的認識を繞つて存在すると云ふを妥當とする。一學校の校長
は生徒の全部の責任を負ひ、一國の宰相は國民全部の責任から逃避することは
出来ないであらう。されば如上の一婦人の實例も更に斯様な觀點から眺めて見
て、新らしい内容に到達することが出来るのではあるまいか。徒らに外面の凌
辱感に苛ら立つ代りに、所謂大乘的立場にたつて徐ろに靜觀の眼を點するとき
這般の光景は廓然として轉回するを覺えるであらう。私共の本問題に對する關
心と興味とはこゝに在ると言へる。

6

元來男女兩性の間で、同じ罪を犯し、男は放縱の振舞を演じながら、少しも
恥と感しないのに、女性のみ獨り其の全責任を負ひ敗殘の裡に萬斛の涙を飲ま

ざるを得ざる所以のもの。畢竟するに社會が女性一般に對して、その貞操上の
責任性をより重く、より大きく認識してゐる結果に他ならないのであつて、こ
の點に於ては女性に對して社會は思ひきつて其の優越性を許し且つ要求してを
るからではなからうか。

7

さて、世間でよく或る仕事や藝能に對して、男女何れが優れてゐるかを論評
される場合が屢々ある。しかし斯様な穿鑿は、性一般と云ふよりも寧ろ個人々
々の特殊性に依存することが多い。特に將來社會各般の文化の進むにつれ、そ
の自由活動の範圍が擴大され交錯するに従つて、性の何れが優れ、及何れが劣
れりとも輕々しく斷定し得るものではないと思ふ。しかしながら吾等の以上述
べ來つた當面の問題である貞操こそは、特殊の位置に在るのであつて。少くも
も現下日本の吾々社會に於ては女性一般の貞操線は、其の位置が遙かに男性の

それに優越してゐると斷言して差支へあるまい。公平に見て吾等の社會は、それが當然だと認識し、又其の認識の集中度が其の責任の高度を標示して居ると考へて好いと思ふ。

8

以上により吾人は本邦女性の貞操優越觀（男性に對して）を見る。そうして毎日の様に起つて來る實例がまざ／＼と私共をさう判斷させるのである。然るに翻つて私は他の半面を考へて見たい。それは何う考へて見ても男女兩性に由つて斯う貞操性に格段の差等があつて可いと云ふ理由は思考されない。成程我が邦に於ける家族制度は、女性に對して峻嚴に否寧ろ慘酷と云つても可い程その貞操の純潔さを要求して來た。或は今後も社會は尙永久にさう有るべきことを希求するに相違なからう。併しながら、さればと云つて性行爲の純潔と云ふことから考察すると、倫理の上から云つても、社會上から考へても、人世夫婦

の和合と云ふものが至上と考へられる以上、鶉の毛程もその間に陰翳や罅隙があつてはならぬ。純潔なる貞操の前には男女兩性にとつて性の批判の標準を二三にすべきものではない。女だから嚴重にしなければならぬ、男だから放埒で可いと云ふ理由はなく、人間の神聖な貞操の祭壇の前には兩性とも平等に叩頭してその純潔性を誓ふ可きものであらうと思ふ。この一面から、私は男女兩性貞操平等論を主張したのである。

9

私は以上に由つて一方男女兩性貞操差別觀を得、今又他方に於いて同じく其の平等觀を得た。さればこの二律背反の兩命題は何う處置せらるべきであらうか。

惟ふに前者の差別觀は現實の存在を示し、後者の平等觀は當爲としての理念を示すものであつて、前者は「ある」を語り、後者は「ある可き」を示すもの

であらう。

斯くして此の「在る」の差別的現實を「在る可き」の理念に止揚する所に人間の努力が課せられてゐる。しかして此の差別から平等への精進の道に二通りある。一つは男性自身の自力に依る向上であつて、一つは女性の高き位置より男性への救ひの手を差し延べることに依つて救はるゝのである。何れにしても、不公平な差別を撤して純潔な性の平等へ進むことである。

10

しかしながら前者即ち男性の自力に依る向上は、なか／＼にむつかしい。何故なれば男性自身低き泥中に踰いてゐるからである。しかし女性は、貞操の高き位置に在る。其の清き手は、男性の淤泥を洗ふに充分である。吾々は大きな希望と期待とを以つて日本の女性に望みたい。男性は既に汚辱の中に在る。之を救ひ之を清むるものは、恐らく日本婦人を除いて他に求めることは出来ない

であらう。

私は本邦に遊廓の存置せられてゐるのを遺憾に思ふ。斯くの如きは國辱であるといふ廢娼論者の所説に賛成する。而しながら、一方男性が貞操上の問題について、餘りにも無關心であり、理不盡であり、或る場合には亂暴狼藉でさへあることに想到するとき、此等の娼婦と稱せられる憐むべき幾萬の婦女子が、坑穴に投じ、全然身を屈辱の泥土に委しつゝも、なほ動もすれば、純潔なる社會層に對して、潜行的にしかも執拗に浸潤しようとする不健全なる惡風を緩和するに役立つかの感がある。芥の如く貞操を抛り出して、動物の如くに生活しつゝ、なほそこに、彼の女達の存在の意義を見出さぬでもない。

11

よく言はれて居るやうに男性の進行方式は直線的であつて、寸毫も曲げない強剛なところに在る。で、前面の目を遮る障礙に對して、若し意の如くならざ

れば破壊粉碎して進む。斯る際の男性的態度は、人を殺すか自分が殺されるかである。血の闘ひである。しかして女性の執る途は、いつも柔かき曲線方式であつて、破壊の替りに創造であり、殺伐の替りに生産である。若し世の女性が、自己の使命に徹底して、性に溺れた唯一人の男性（自分の夫なら猶更のこと）でも、溷濁の中から救ひ出して、清淨の世界へ導くことが出来たならば、私は真に天の記録の金鷄勳章に値ひするものと言ひたい。そしてかゝる女性の尊い例を次ぎの二つの場合に見ることが出来る。

12

その一つは谷崎潤一郎氏作「或る調書の一節」と云ふ二十頁許りの短篇劇で、他の一つは税所敦子刀自の夫篤之氏に對する實話である。後者は更に篇を改めて書くこととするが、前者の梗概は次の通りである。

ある悪漢Bは、賭博犯で三回、窃盜犯で二回、強盜犯で三回も罪を犯し、其の上、二回の殺人犯を自白すると云ふ猛者である。而して劇はその公判廷での裁判長と本人との問答の聞き取り書きである。ところが本人の自白の中で、その妻Eが夫の悪業に對して、悔い改めてくれ、自分はどんなに打たれても、叩かれても、殺されても可い、どうか眞人間になつて呉れと云つてかき説く、その涙の中に、水晶の如くに光る女房の眼が、神様の如くに尊くなつて拜みたいやうな、自分の胸を射透すやうな心持がして來ると云ふ筋である。勿論これは氏の理想觀であつて、事實には遠いものであらうが、僅か二十頁許りの小篇であるけれども、深い意味を有つてゐると思はれる。而してこれを、社會に照して見ると、よし夫は悪漢Bほどではなくとも、その夫の不始末に對して、浮ばれない苦勞をする小型の女房Eがどんなに世間に多いことであらうか。

そして上に述べた税所敦子刀自の場合が全くよく之を代表する。刀自に就いては更に稿を改めて記述しよう。

私共が、學校の澤山の卒業生から相談を受ける世帯崩れの咄や苦勞談は、十中八九大抵この種の事柄である。その度毎に私は、以上の趣旨を咄して此等の女性を勞り激ます。私はいつも次のやうに言ふ。婦人だとして戦ひはある。しかも血みどろの戦ひである。婦人の戦ひは長期戦である。いつが始りで、いつが終りともなく、或は一生涯の戦ひかも知れない。しかも皆さんの戦ひは、愛の戦ひ、貞操の戦ひ、平和の戦ひであつて、いつも涙の戦ひである。相手方が唯一人の不良であつても、それを殺す戦ひではなくして、産み出す戦ひ、救ふ戦ひ、生かす戦ひである。正義折伏の戦ひ血の戦ひでなくして、佛菩薩の戦ひ仁愛の戦ひである。然るに世間の人々は、種々な汚い下劣なものを搜し索め、熱風に吹き捲くられて、渴ききつて血眼になつてゐる。斯の渴きの苦しみを醫するものは、女らしい女の魂を搾る涙より他にはない。これこそは吾等の生の

泉。自然の乳房である。

然るに何事ぞや。近頃は婦人自身がこの渦中に躍り込んで、其の神祕の魂が生氣を失つて萎びかゝつてゐるではないか。婦人自身に返れ。そしてもつともつと泣け。泣いて軌道外を馳せ回り息を切らしてゐる男性を救ひ出せ。

島崎藤村氏は、其の著藤村隨筆集に「涙の力に」と題して、

「奈何なる點に、最も婦人の力を期待するかとのお尋ねですか。私は涙の力にと答へたいと思ひます。」

と言つてゐる。

斯くして婦人は涙の戦ひに由つて男性を救ひ世を救ひ出すのである。

(全書一二四七頁)

第二 愛について

1

母愛と性愛とは、明白に區別して考へなければならぬ。然るに、同じ愛と云ふ名稱の下に屢々混同せられて、思想の上に於ても、又行爲の上にまでも紛亂を見ることの多いのは遺憾なことである。

それでは母愛（普通には母性愛と云ふことになつてゐるが私は之を母愛と云ふ。つまり同じ名稱なのであるが簡単に云ひ詰めた位に考へてほしい）とは何う云ふ愛であるかといふに、普通云はれてゐる絶対愛と云ふ言葉がよく當て簾ると思ふ。元來母が子を愛するのは、利益の爲めでもなく、名譽の爲めでも、美しい爲めでも何でもない。世には獨立の生計が立たないで、始終母親を困らせたり、不名譽のことがあつたりしても、母は却つて餘計に可愛いのである。

憎い憎いと人には云ひつゝ、内心は善良な子供にもまして可愛いのである。つまり所何等の理由も條件もなく、たゞわけなしに可愛いのである。だから寧ろこれを純愛と云つた方が良いかも知れない。それは愛の中に利害とか名譽とか、美とか醜とか、大凡何物も溶け込んでゐないと云ふ程の意味である。だから母の愛には、何々だからと云ふ「故」はない。強ひて理由を云へとならば、可愛いから可愛いのだと云ふより他に、表現の言葉はないであらう。

佛蘭西の文豪「モーパッサン」は小説「女の一生」に初産のときの母親の心境を巧みに描いて、次のやうに言つてゐる。

「赤兒と共に新らしい歡喜が、新鮮な悅樂が生れた。痛苦から僅かに一瞬に救はれてしまつて、今は前より却つて幸福であつた。そして母なることの喜悅を、ひし／＼と感じたとき、心も肉も蘇つた。」

と云ひ。又

「この人間の幼虫が手足を動かしたり、口を開いたりするのを見た時、そして皺が寄つてゐるその小さき顔に觸つて見たとき、幸福に心が溢れて最早二度と再び自分は、この世の中に倦むことはないであらうと云ふことを知つた。兩腕に抱いてゐる此の原子に對する自分の愛は、他の有らゆる事に冷淡になる程夢中なものであるから。」

そしてこの場合、赤兒の父親は彼の女の憎惡に充ちた惡漢であつたし、またその赤兒すら、今の今まで「死にさうだ、死にさうだ」と思つた程の呪はしい苦痛の塊物（彼の女は斯く言ふ）であつた。

私は常に「母は兒を産み、愛を産み、道徳を産む」

と云つてゐる。何はさて置き母愛は純愛であり、絶對の愛であり、又果成愛である。

上の母愛に對する愛が性愛である。性愛は誰でも承知して居る様に、決して無條件、無理由ではない。若し性愛が無條件、無理由で成立するならば、特殊な個人間の性的な愛は考へられないであらう。而かして先づ第一に性愛を制約するものは、極普通の場合に於て美と醜とである。若し人格と云ふことが愛の理由の對象である場合ですら、人格それ自らが愛の條件であり、理由である。

埃太利の平和の婆さんと喚ばれてゐた「フォン・サットネル」男爵夫人の書いた「武器を捨てよ」と云ふ小説がある。その中に「フレデリック」と云ふ青年と「マルタ」と云ふ女性とが戀を語る場面がある。

「斯くして私達は、互ひにそれ以上の質問を仕始めた。いつから互ひに愛したのかと云ふ問題から、何故にと云ふ論議に移つた。最初に私を惹きつけたのは、彼が戦争の話をした其の話振りであつた。私が密かに考へて居、感じてゐたことを彼は私よりも、もつと明かに考へ、もつと強く感じ、そして全

く自由にそれを語つたのであつた。そして私は、彼の心が、いかに其の職業の興味以上に優れてゐるか、其の知識が、時代の見界に卓出してゐるかを諒解した。彼に對する熱烈な愛情の底に潜むものは、いはゞこれであつた。なほ此の他「何故に」と云ふ問ひに答へる無數の他の理由があつた。彼は美しく優れた風采でもあつたから、彼の聲はやさしく、しかもしつかりした調子を帯びてゐたから、彼はあの様にやさしい息子であつたから。

マ「そして貴方はなぜ私を愛しますか？」

と私は自分の報告を止めて訊いた。

フ「千と一つの理由の爲めに」

マ「お聞かせ下さいませ。始めに千の方を」

フ「偉大な心、小さい足、可愛い眼、立派な心、やさしい微笑、生々した

機智、白い手、女らしい品位、愕く可き、、、」

マ「お止め下さい！ お止め下さい。千の理由のこらす仰有るの？ それ

より一つの方を仰有つて下さい」

フ「それは一層簡単です。その一つの強い不可抗な理由は、他の一切の理由を含んでゐますから。私はマルタ貴方を愛するから愛するのです。

これが一つの理由です。」

即ち性愛は種々の理由、千と一つの條件から成立してゐる。故に母愛は純愛であるといふときでも、同時に性愛も又純愛だとは云ひ難い、而かして前述の通り前者は果成愛であるといふことが出来ても、後に論ずる如く後者は未成愛である。所詮世間で屢々云はれる如く、性愛とか、戀愛とか云ふものは、純真だとか、至上だとか、神聖だとかいふ可きものではない。愛の成立する本質からがさうである。

以上によつて母愛と性愛とは、明確に區別して考へなければならぬと云ふことが判つた。即ち母愛は絶対愛であるが、性愛は相對愛である。母愛は純粹であるが性愛は不純である。前者は上述の通り果成愛であるが、後者は未完成愛である。

しかしながら、こゝに斷つておかなければならぬことは、斯様に性愛は母愛に對して對蹠的であつて、むしろ低い位置にあるものである。だから性愛は濁濁と汚穢に満ちてゐる。さてこそ吾等の清淨心を保つ爲めには、宜しくこれから逃避すべきであると考へてはならぬ。何故ならば性愛は所謂愛なるものゝ入り口であつて、やがては相對より絶対へ、不純より純粹へと、可動し發展し進化するからである。されば母愛を定言愛とすれば、性愛は進化愛と稱すべきであらう。

4

さて前述の如くに性愛は、千と一つの理由と條件の下に制約せられてゐる。譬へて見ると性愛の構造は澤山の積木細工で出来て居る家屋の如うなもので、その千と一つの積み木の一つ一つと、愛の全体とが深い依存關係にある。で、その何れの一小片を取り去つても性愛の全家屋は崩壊を免れ得ないであらう。まことに危険千萬な状態といはざるを得ない。

さりながら性愛は一面これあるが爲めに、可動的であり進化的であると謂へる。兎に角善かれ悪しかれ、前進もし、後退もする。前進の場合は愛の昂進であつて、後退は即ち憎惡である。しかして前進と云ひ昂進と云ふのは、どんなことかといふと、千と一つの理由と條件とが、類化せられ融和せられると云ふことを意味するのである。譬へて見ると積木細工の家屋の用材の一つ一つが、鋼鐵の如くに鍛鍊せられ接合せられる様なものである。で、其の結果性愛は個々の離ればなれの積み重なりでなく全体凝つて金剛不壞の一態となり、愛の全

態制は堅くして自由になる。私は今、物の發展とか、分化とか、進化とか云ふことが如何なる意義を有つてゐるかを吟味しようとは思はない。しかし確かに千と一つの條件の危険な制約と依存から解脱すると云ふ意味合ひに於て性愛はより鞏固に、より自由に進化すると云ひ得られると思ふ。

5

斯くて性愛は、鞏固になり、自由になり、進化する。今一層これを具体的に言へば、男女兩性の兩つの魂が漸次歩み寄るのであつて、其の接近度を鞏くした、自由になつた、進化したと言ふのである。例へば寒暖計の度盛りのやうなものである。温度の高さが其の近づきと隔りを示す。一般に言つてこの寒暖計の度盛の標示即ち温度を吾々は信と名づけ、其の信の特殊の場合として、之を性關係に當て箴めて言ふとき特に貞操と呼ぶと考へたい。

6

さて上の如く吾々の普通貞操と謂ひ習つてゐるのは、性愛の進化の度、若しくは自由の度を謂ふと考へられるのであるが、然らばこの度盛りを昂進せしむる力は何かと云ふに、前篇に於て一度言及した通り、敬と愛との兩つである。つまり男女兩性の相互の敬と愛との化合熱が、性愛關係を温め、貞操の温度計數を促進せしめるのである。

7

然らば敬と云ひ、愛と云ふは、何ういう活らきであるかと云ふことになるが、かうした哲學的な困難な解釋は私には判りかねる。しかし學者に由つてよく言はれてゐる様に、愛は知なりと解すれば、或る程度までは理解し得られる様に思ふ。要するに愛と謂ひ、理解と謂ひ、信と謂ふ。是等はそれ／＼私共の別個の精神作用ではなくして、同一体系に屬する同一の心的生活を、感情の方面からか、知の方面からか、若しくは意志の方面からか何れかの側面から見た

場合に、その言ひ方が違ふのであつて、例へば例のガリレオが、裁判官の前で「どうしても地球は動く」と叫んだと云ふ。これは知であると言つても、愛であると言つても、信であると云つても誤りではないと思ふ。かう考へると吾々の普通貞操と云つてゐるのはこの同一の場合を性關係に延長したまでであつて矢張り知であり、愛であり、又信である。要するに兩者の自我の歩み寄りの程度に、各々その見た側面に由つて特殊な名稱をつけたに過ぎないのであらう。

8

次ぎに敬であるが、敬は又一層解釋に困難な理念である。これについて私は法華經の常不輕菩薩品第二十に載せてある例が面白いと思ふ。夫れは昔、常不輕と名くる一人の比丘があつて、他人を見るとその誰彼を問はず、皆悉く禮拜讚歎して我深く汝等を敬す。敢て輕慢せず。何故なれば汝等皆菩薩道を行じて當に佛となることを得べしと言ひ、少しも經典を讀誦せず。ひたすら禮拜を行

じて、同じ言葉を繰り返すのであつた。しかし次第次第に此が進んで來て、終ひには遠方から人を見ても、態々その人の許迄走つて往つて、禮拜讚歎して同じことを繰り返して言ふ。斯くすること多年。其間罵詈譏を受けたこと屢々であり、木片や瓦礫を擲げつけられて、犬を追ひ回す様に打擲せられるのであるが、この比丘少しも僻易しない。矢張り走り逃げのびつゝ聲高らかに我汝等を輕しめず、汝等皆作佛たるべしと呼ぶのであつた。世の人之を名づけて常不輕と稱した。然るにこの比丘臨終のとき、六根清淨を得て、大衆皆信伏隨從したと云ふのである。

9

要するに、敬は尊敬若しくは畏敬であつて、絶對者の前に畏みおそれて俛れ伏す我等の心の態度であると考へられる。

されば自己を其の絶對者の前に露呈するとき、有りとあらゆる醜いもの、卑

しいもの、低いもの、穢いものは、悉皆浄められて所謂六根清淨の法悦境、佛教の謂はゆる空の世界に到達する。この際に起る緊肅感を敬と稱するのではないかと思ふ。されば敬と云ふときは、客觀にか或は内面にか、どこかに絶對者の榮光を見出し、これに浸り、これに浴し、その中に畏れ戰きつゝ叩頭してゐる自分自身を見出すのであらう。カントの

「其の聲は、最も不敵なる罪人をも戰慄せしめ、彼をして、その前から隠れざるを得ざらしめる」

と言つた言葉が一應理解せられる様に思ふ。

10

如上の通りに解すると、敬は差別關係であり、愛は平等關係であつて、しかも前者は遠心別離の氣味合ひがあり、後者は求心牽引の消息がある。前者は峻嚴なる指標的法則であつて、後者は實動圓轉の力である。兎に角この遠心力と

求心力との相互の調和に依つて至妙なる性愛の世界の圓運動が行はれるといふべく、又敬、愛兩つの元素の化合燃焼によつて、道德の焰が燃えさかると言つても可からう。しかしして何れにしても此が我等普通呼び馴れてゐる犠牲的精神であらうと思はれる。

11

しかし此等のことは、なにも性愛の世界にのみ特在してゐて他には存在しないと思ふのではない。大凡人と人との間の道德的交渉は恐らくこの法則に支配されぬものはないであらう。たゞこの性の場合に特殊の點だと考へられるのは、その兩者の關係が密接して濃厚且つ強烈だと云ふ點にある。されば中庸にも

「君子の道は、端を夫婦に造す。其の至れるに及んでや天地に察かなり。」とある。而して前にも言つた通り性愛は廣い愛の世界の入り口である。

要するに性愛は未完成的な進化愛であつて、敬と愛との犠牲的精神に由つて、完成に向つて努力と精進とをつゞけ漸次自由になるのであるが、母愛は之に反して愛の果成から努力へと向ふ。故に兩方の場合に於いて愛と努力とは等しく形影相伴ふのであるけれども、其の向ふ方向は互に相背馳してゐる。即ち母愛は愛より努力へと向ひ、性愛は努力より愛へと向ふ。この意味から前者は天上の愛、又神の愛といふべく、後者は地上の愛又は人間の愛と云つても可からうと思はれる。

さて。性愛のうちでも謂はゆる戀愛は又其の初級に屬する。ところが世間では不思議にも戀愛は至上だとか、純真だとか甚だしきに至りては戀愛は神聖なりなど謂はれる場合が往々ないでもない。特にこれらの言葉は知識階級に屬す

る婦人に由つて無造作に且つ無關心に玩ばれる。併しながら此位間違つた言葉の使ひ方はない。この途方もない誤つた言葉に欺かれて、若い青年男女を魔道に導くことがどんなに多いことであらうか。どういふ有難い冠を被つてゐても、沐猴は矢張り沐猴であつて、如何なる面白い劇を演じても、猿芝居は依然として猿芝居である。しかして到底神聖だとか、純真だとか謂はれる様な當躰では有り得ないのである。以上性愛について述べて來た通り戀愛は矢張り性愛其のものであるは勿論のこと。しかも性愛の第一段階に屬する初級不熟の愛である。さればこの愛の中には美も醜も、善も惡も、利も害も、精神も物質も多分に恐らく其のまゝに含まれてゐて、千と一つのガラクタを包有してゐる雑袋具に過ぎないのである。しかしてこの袋の結び目を緊握して自己の獨占權内に牽き寄せようとする。所詮戀愛は洗鍊を経ない強烈な自我的衝動に過ぎない愛關係だと考へられる。

然るにこの自我的の戀愛が前掲の敬と愛との本道を通らないで不思議にも否定作用の間道を通り抜けて對者の胸に近づかうとする場合がある。これは人間自然の心理であつて、屢々年若い者の運命を危い深淵に牽き入れるのである。これを私は戀愛の否定作用と呼んでゐる。つまり戀愛の否定作用といふのは、自力の難行道を避けて、似而非なる他力の易行道に由る頓成愛ともいふべきものである。左に例を擧げて説明して見たい。

14

今こゝに一個の洋燭があるとす。このコップの用途を言ひ現はすとき、これは水飲みだといふときの單なる肯定と、これは醬油入ではない。唾壺でもない。何々ではない。と一切を否定して、さて後水呑みだと決定する場合と、何れが強く心にひそくかといふと、單なる肯定の場合は、言葉の力が至つて弱く鈍く感ぜられるのであるが、否定の場合には頗る強く鋭く感ぜられる。これに

は種々の理由もあるであらうが、今はその様なことを論じてゐる暇はない。つまり同じ水飲みだといふ言葉の表現でも、單純肯定のときは力が弱く、否定的肯定として限定せられるときは力が強くなるのである。例へば同じ有るといふ言葉でも、無きにあらずといひ据ゑて一度否定し、更にたゞみかけて否定を重ね、結局肯定の意をあらはすのとは、其の意の輕重と強弱に非常な相違がある。これと同様に小供にお菓子を與へるとき、これはお前にやるのだよと單に肯定的に言ふよりも、これはお前以外誰にもやらない。お前一人にやるのだ。といふ場合と併せ考ふるとき、其の意志の力の差別が明白に判る。即ち單なる肯定と、一度否定作用を経過して篩にかけた肯定とは、同じ肯定の表現でも、心の響きに大きな相違を感受するのである。

15

戀愛の否定的態度も又この心理に他ならない。一つの戀愛が成立し、對者の

心を捉へん爲めには、親近を否定し、社會を否定し、遂に肉体的自我をも否定して、その對者の心を鏘と緊握し、自己の物と爲し、自我の慾望を充足しつつ、遂に死にまで到らんとする。是れ即ち誤つて若き男女間によく見る情死の心理過程に他ならない。されば情死は自己の性的所有慾を完全に充たさうとする否定的最後の大詰であると言つて可からう。されば情死には、自己單獨の自決は考へられない。自己も死に、相手も殺し、双方とも共に同様に考へあひ、同じ心理を枕にして情死は遂行せられるのである。

この明白なる事象を猶且つ神聖だとか、純真だとか云ふのは、何う云ふ譯であらうか。思ふにそれは偶々そのときに起る自己陶醉の心理作用の形容詞に過ぎない。丁度飲酒家が酒を嘔んで喉を濡す時、天下何物か此に如かんやと豪語する。その刹那の感じであつて、詰る所性慾本能の充足感に過ぎないと云ふべきであらう。

いかなる場合に於ても、愛と名のつく處に、相手の生を奪ひ取らうとする理不盡な痴情めいたことは、之を神聖だと考へる丈けでも冒瀆である。

16

此の間、歐米人は、宗教上の信仰から惹いて戀愛觀念について、特殊の事情の下に措かれて居る。

「是故に人父母を離れて其の妻に合ひ二人一体となるなりと云へるを未だ讀まざるか。然ればはや二つには非ず一躰なり。神の合せるもの人之を離すべからず。」（馬太傳第十九節）

これは誰も知つて居る聖書の名高い文句であるが、凡て歐米人の結婚觀は、此の一節の中に包含されてゐると考へられる。何故にさう言はれてゐるであらうか。

この文句の中に二つの大切な思想が含まれて居る。その一つは夫婦の結合は神の選定に由るのであつて、人間個人の肆意に委すべきでないとする。而して他の一つは、離婚の否定である。後者は兎も角もとして、今こゝに問題となるのは前者にある。

18

右に由れば人間の結婚は、神先づ定めて人々に従ふのである。人間自由の選擇の如くにして、しかも神の支配の運命に措かれてある。必然の如くにして自由であり、自由の如くにして必然の軌の下にある。で、此の必然と自由の兩者の調和劑の苦しい、しかも重大な役目に當るものが、問題の戀愛である。されば、戀愛は神の御言葉に由る甲男の符であり、同時に乙女の節である。兩方の符節が相合うて戀愛結婚が成立する。若し兩者の間に此の至妙なる戀愛劑を想定しなければ、前掲の聖書の本文は、全然空文になつて存するであらう。

19

されば、自由戀愛等々に於ては、戀愛を豫想して始めて全きものとなるは勿論のこと、同時に戀愛は絶對至上のものとなり、神の御聲となり、神聖となる。しかして斯うした兩者の間に、苟めにも第三者の駢聲を容れてはならぬ。で、世間の有りふれた戀愛神聖を口にする者は、深く此の點を省察すべきであつて、さうでなければ神聖といふ文字は、全然其の神聖性を喪失することになるであらう。

20

要するに、戀愛は行きかゝり上神聖であると解する人にも、さう解しない人にも、其の本質に異りのあらう筈はなく、何れにしても戀愛は神聖だなぞ考へたり、又さういふ言葉を使ふてはならぬ。

21

次に、私共は結婚は戀愛の墳墓だと云ふことをよく聞く、いかにも結婚は戀愛生活の終幕であつて、戀愛は結婚に由つてその兇猛なそしてあぶなかしい目を閉づるのである。つまり結婚に由つて自己の所有慾が滿され、弩張してゐた矢が弦を離れた即下の弛緩性を言ひ現はした言葉である。例へば私共が書肆の書架に並ぶ書籍を瞥見するやうなものである。目次や目録の美しい並列が私共の心を踊らせる。須臾にして自分の所有となり、二頁三頁と飛ぶ様にして讀む。十頁と經たない中に最う飽滿して塵埃の中に埋没せられる。これ皆人間の所有慾の戸惑ひの現象と言ふ可きであらう。しかしながら斯うした崩れ落ちた戀愛の墓場の中から、新生の夫婦愛、即ち第二段階の性愛が美しい花と色とを含んで芽生えるのを見のがしてはならぬ。

畢竟第一段の戀愛進行の航路は自然必然の大海にあつて、狂風に驅られて駛走を續けて來たのであるが、之に反して第二段階の夫婦愛は艫と棹とを操つて

力一杯激流に棹して遡行する様なものである。前の場合には自然の風力で進んだのであるが、後の場合は人間の力に由つて前進するのである。斯様に同じ性愛といつても、戀愛と夫婦愛とは、劃然區別して階級的に考へなければならぬものと思はれる。

されば、戀愛は存在世界の生活であると私は言ひたい。その結果船は目的地に安着するにせよ、又沈没するにせよ。何れにしても自然の劇しき疾風に吹き捲くられながら駛走をつゞけるのである。時には指針も尾舵も破壊せられて、怒濤洶湧の大海原に漂蕩することさへ稀ではない。

之に反して、夫婦愛は、人間の當爲とか義務とかいふ理性の世界に屬するものである。而かして此の存在界と理性界とを維ぐ繼ぎ目が結婚式であらう。

されば、結婚式は、歐米風な戀愛結婚からにしても、或は日本の様な媒約結婚からにしても、何れにしても社會全躰に對する大否定を背負ふた力強い肯定でなければならぬ。(此の否定を吾々は普通處女の貞操若しくは貞潔と呼んでゐる。)この意味に於て、少くとも結婚式は、其の要素として廣く且つ強き社會への接觸面を有つと言ふべきである。

であるから、當今若き人々の考へがちであるやうに、戀愛、結婚、離婚等々は男女兩性間の自由勝手なもので、たゞ單なる私的生活であるから他人の厄介にならぬなど考へてはならぬ。特に次に考ふる所の、エレンケイの唱ふるやうに、何もかも戀愛本位に考へて、結婚式を無視したり、法律上の手續さへ不要のこととし、謂はゆる新らしき思想と稱する名前の下に凡てを置き換へさへすればそれで好いとするのは、淺薄の至りであつて大きな考へ違ひである。

要するにケイの主張する結婚生活(自由戀愛、自由結婚、乃至自由離婚の説)

は、嚴肅なる否定面を有つてゐない單純肯定を以つて、彼の女の自由なる戀愛結婚を遂行せしめようとする所に見逃がし難き缺陷が有るやうに思はれる。

24

つぎに、茲に附記しておきたいことは、能く夫婦の間に倦怠期といふものがあつて、結婚後三年乃至五年位の後には、必ず誰でも襲はれるものだと言ふ人がある。成程好き嫌ひの情緒を本位とする自然戀愛界には、さういふ氣紛れごとのあるのが普通であらうが、奮闘生活の精神界には、そんなたるんが灰色時があらうとは考へられない。倦怠期などいふものは、たより少い風の力で、人間の難航路を享樂氣分を通らうとするから起る悲鳴の聲であつて、人生の眞の生活には、そんな蒼白の夕暮ときが有らうとは考へられないのである。

25

以上縷述して來たやうに、戀愛と結婚後の夫婦愛とは判然と區別すべきもの